りは少し溫く、誠によい味でございます。秀吉は心の中に、『この兒は普通の子供ではなさそうだ。』と試しに、

『もう一杯いたゞかうぞ。』

と、いひました。ところがその三杯目は、二杯目よりは又心持ちあつく、一層よい味でございます。秀吉は『一事が萬事だ、茶の湯一杯にこれ程の氣のつくものは、何事にも氣がつくであらう。』と、その場から城へ連れかへりました。

秀吉の眼は少しの間違ひもありませんでした。三成は大きくなるにつれて、どんな事にも智惠がよくまはります。それにつれてだん〳〵と出世しまして、近江の佐和山の城主となり、秀吉の死にまする時には五奉行の一人にまでなつたのであります。

それですから、戰の手柄で出世をした加藤清正、福島正則といふ人たちは秀吉に恩になつた人々でありますが、みんな三成を好きません。

秀吉の死んだ後の事であります。ある時、清正等が三成を殺さうとしました。それで家康は三成を佐和山の城へ歸らしてしまひました。城の下の琵琶の湖は靜かに白く

光つてをりますが、靜かでないのは三成の心でございます。

『どうかして家康を滅ぼしてしまひたい。

その時には自分もまた勢を張ることが出來よう。』

かう思ひますと、矢も楯もたまりません。早速、會津の上杉景勝と相談して、東と西とから家康をはさみ擊にしようといたしました。

それで景勝は、家康が伏見に來いといつてもすこしも出てきません。會津の城にゐて城や砦を修繕して盛に戰の用意をいたしてをります。この噂が、家康の所へ聞えますと、捨てておくことは出來ないと、伏見の城は鳥居元忠など一千人程の兵に留守居をさせ、慶長五年六月に五萬五千人の兵をつれて上杉征伐に出かけました。あとで三成は、『うまく行つたぞ、さあ戰の用意だ。』

と、急いで佐和山の城を出て大坂に行きました。大坂の城には秀頼や、秀頼の母の淀君がをります。三成は早速手紙を方々の大名たちに出しました。

毛利輝元を總大將として、島津義弘、浮田秀家など四十六人の大名が集りました。

戰の方法は、

毛利輝元らは大阪に留まつて秀頼をまもつてゐますこと、

一隊は丹波の細川幽齋をうつこと、

一隊は伊勢の方へ進むこと、

一隊は北國の方へ向ふこと、

毛利秀元、小早川秀秋、島津義弘、鍋島勝茂、石田三成等は四萬の兵をつれて伏見の城を攻めることになりました。

七月二十四日家康は下野の小山といふ所まで行きました。この日三成等が兵を擧げて伏見の城を落してしまつた。といふ知らせの使がまゐりました。

家康もこれをききますと、會津征伐どころではありません。

江戸の城によつて戰をしようか、

西へ歸へらうか、

東へ行かうか、と惑ひました。

この時、井伊直政は

『よい折でございます。いよ／＼徳川の天下になるのでございます。會津の方へは一人の大將を殘して、あとはみんな西へ上つて、あの三成に組してゐる者たちを滅してしまひませう。』

と、元氣に申しました。家康はじめみんなのものは、

『成程それがよい。』

と、相談をきめましたが、ここに一つこまつた事は、今この軍に、福島正則、黑田長政、池田輝政、細川忠興、加藤嘉明など、大阪方の大將たちがたくさんをることであります。

『この大將たちは、どちらへつくであらうか。』

それが徳川の方にとつて心配でございます。

翌日家康は、これらの人たちを呼びまして、

『もし大阪方におつきでございますれば、心おきなくお歸り下さい。』

と、いひました。すると、これらの大將はもとから三成がきらひな人々でございますから、まづ正則が、

『今度の戰は、秀頼公のお知りにならない事でございます。あの三成奴がたくらんだ事と思ひます。どうぞ私を先鋒にさして下さい。私はきつと三成の首をとつてご覽に入れます。』

と申します。その他の者たちも、

『全く正則殿のいふ通りでございます。私たちはどこまでもお供いたしませう。』

と、いひますので、德川の者たちもやつと安心して、

『それでは西へ上らう。』

と、相談をきめてしまひました。

さてそれでは、誰があとに殘つて景勝を押へてゐるか。誰もみんな西へ上りたくてたまりません。その時本多正信が、

『これは秀康殿におたのみしたらよろしうございます。』

と、家康に申しました。家康もそれがよいと考へましたが、秀康は家康の子でありまして、なか〳〵の元氣な人でございますから、それをききますと、

『私は西へ上ります。その役目は他の者にお命じ下さい。』

と、どうしてもききません。そこで家康は大きな聲をして、

『おまへは景勝がこはいのか。』

と、叱りつけました。弱いといはれるのはいやですから、秀康は仕方なくここにとゞまることになりました。

西に上るものは二隊に分れて、一隊は正則等が先鋒となつて東海道を西へ上り、一隊は秀忠が大將になつて中山道を西へ上りました。

家康は八月の六日に江戸まで歸つて城に入りました。

正則等は八月の十四日に清洲の城まできました。中山道の軍は信州で眞田昌幸のために支へられて上つてきません。

その時、石田三成は大垣の城まできてをります。大垣と清洲の間は僅かに七里。戰

はまだ始まりませんが、ものすごい様子が尾張、美濃の邊にみち〳〵てをります。

正則等は、家康が一日も早く來てくれればよいが、と思つてゐますが、家康はどうしたのかなか〳〵來ません。その中に犬山の城も、岐阜の城もみんな大阪方についてしまひました。徳川方は

『これではぐず〳〵してゐられない。』

と、先づ岐阜の城を攻め落し、犬山の城をとつてしまひました。

これをはじめとして、戰はつゞいて始まりました。あちらが敗けたり、こちらが敗けたり、西が勝つか、東が勝つか、様子は少しもわかりません。

家康は九月の一日に江戸を出發いたしました。この時或人が家康に、

『今年は西の方が塞がりでございます。方角をかへてお進みになつてはいかゞでございます。』

と、いひました。家康はわらひながら、

『西が塞がつてゐるから、これから撃ち破りに出かけるのだ。』

と、勇ましくも西に上りました。そうして十三日に岐阜につきました。

家康が來たので東軍の勢は一時にあがりました。それと知つた西軍も、

『よくきた、今に捕へてやるぞ。』

と、勢づいてきました。

この時、西軍の勢は十萬八千人、東軍は七萬五千。

家康もこれは容易でない、何とか方法をめぐらさなくてはならない。と、まづ小早川秀秋、毛利秀元に家康の方へ味方する様にすゝめました。秀秋は秀吉の養子でありますが、三成と仲が悪いので家康の方へつくことを承知しました。秀元も何と考へたか承知しました。そんな事とは西軍では知りません。

家康は又

『俺は平野で戰ふのが一番勝手がよい。何とかして、敵を大垣の城から出してしまひたい。』

と、考へました。大垣の城は堅固な城でありまして、西軍が大兵を持つて、この城に

よつてをりましては、家康も全く心配なのでございます。それで、

『東軍は、脇道から近江に行つて佐和山の城を攻めとり、西と東とから西軍をはさみ撃にする。』

と、いふ噂をたてさせました。これをききました三成は、

『それは大變だ。早く陣を關ヶ原に退いて家康の軍を待たう。』

と、夜の中に陣を關ヶ原にまで引き上げました。これをきいた家康はよろこんで、

『お前たちは長久手の戰を知らないか、あの時、味方は小勢、敵は秀吉の大軍、それでさへ、彼を平野へおびき出して見事に勝利を得たぞ。それに今日の敵は三成の樣なものだ。

たゞ一戰に擊ち破つてみせるぞ。』

これをきいた東軍は、もう勝つた樣によろこび勇んでをります。

九月の十五日夜の明けないさきから東軍は關ヶ原に進んできました。

西軍の樣子はとみますと、

北の端に伊吹山を後にして、石田三成、

その次に島津義弘、

その次が小西行長、

その次は總大將の浮田秀家、

次は大谷吉隆と、南の方へ一列に陣を構えてをります。

大谷の陣の東南の松尾山には小早川秀秋、

そのずつと東の南宮山には吉川廣家が陣を構えてをります。

その下の方には安國寺惠瓊などがをります。

その朝は霧が一ぱいにかゝつてゐまして、やうやく八時頃になつて霧が晴れました見渡しますと、野原は兵でみたされ、山は旗でもつて掩はれ、その間に、刀は日に輝き、鎧は赤に綠に花のさいた樣でございます。

東軍はずん〳〵と西軍にせまつて行きます。三成はそれを見ますと、

『あれ見よ、敵は南宮山よりもこちらへはいつて來たぞ、自分から袋の中の鼠になら

うとするのか。今に家康の首をとつてみせるぞ。』

と、喜こんでゐましたが、もうとうの昔に、南宮山の吉川廣家は家康についてしまつてゐるのでございます。

この日福島正則が先陣をするつもりでをりましたが、井伊直政は他の者に先だゝれてはならないと、まづ戰をはじめました。

正則も『それおくれるな。』と、この戰の總大將の浮田の陣に討つてかゝりました。

関の聲は野山に響きますが、勝負はなか〳〵につきません。

藤堂高虎は大谷吉隆の陣をつきました。

他の一隊は小西行長の陣についてかゝりました。

加藤嘉明らの一隊は三成の陣にかゝつて行きました。

秀家は正則を追ひ拂つてしまひました。

三成は東軍を蹴散らして、今にも家康の陣を襲はうとしてをります。そしてしきりに、狼烟をあげて小早川秀秋、毛利秀元に早く軍を進めよ、といひますが、二人とも

少しも動かうとはいたしません。

戰はます〳〵激しく、砂煙、鐵砲の煙が野をうづめ、天に漲り、西軍の勢がます〳〵強くなるばかりでございます。

家康も氣が氣でありません。早く秀秋や秀元が早く味方になつてくれればよいがと、あせつてをりまするが、秀秋も、秀元も少しも動きません。

西軍もこの二人にぢれてゐます。東軍もこの二人にぢれてゐます。この二人のついた方がどちらか勝つのでございます。が、この二人は勝つた方へつかうとする、ずるい考をしてをりますから、少しも動かないのでございます。

島津義弘は強い兵をつれてをりますが、まだ戰はうとはいたしません。折を見て東軍を一突きに崩してしまをうと、睨んでゐるのでございます。そこへ東軍が進んできました。義弘は

『それ擊て。』

と、號令を下しましたので、まちに待つてゐた兵士たちは、ドドンと一齊に鐵砲を放

ちました。東軍は、

『それ島津だ。』

と、立ちすくみます所を、今度は槍を揃へてつきかゝりますので、大激戰がはじまりました。人は倒れ、馬は傷つき、血は流れて河をなします。

けれども秀秋も、秀元も、まだどちらにもつかうとはいたしません。

大谷吉隆は義理堅い、謀の深い大將でありますが、氣の毒にも眼がみえません。はじめ家康について上杉征伐に出かけようとしましたが、三成がこれを佐和山の城に呼んで、

『太閤のために、是非とも味方してくれ。』

と、賴んだので、そのまゝ西軍についてこの戰に出て來たのでありますが、早く秀秋が家康の方に味方してゐるのを知つて、

『義理を知らないのは秀秋殿だ。もしも東軍につく時には、この吉隆敵を打捨てても秀秋を打取つてやらうぞ。』

と、見えぬ眼をみはつて松尾山を睨んでをります。

西軍の勢の上がるにつれて、家康もまた松尾山の方ばかりを眺めてをります。この時一人の家來が、家康の前に行きまして、

『秀秋殿はまだこちらへつかれる樣子がみえません。毛利殿も心配でございます。』

と、いひました。もしこの二人が東軍につかない時には、到底家康は勝つことが出來ません。

家康はいつも自分の方があぶなくなりますと、指を嚙む癖があります。この時もしきりに指をかみながら、

『さては、あの小悴共にだまされたのか、さうなつてはこの家康も運のつきだぞ。』

と、弱りながらも、

『とに角、誘ひの鐵砲をはなしてみよ。』

と、いひました。そこで東軍の一隊が、秀秋の陣に向つて鐵砲を放ちました。

秀秋はこの鐵砲の音をききますと、

『それ徳川方に味方せよ。』

と、號令をかけました。この時、秀秋の先鋒の松野主馬といふ者が、

『何のために東軍につくのでございますか、それではこの上もない武士の恥でございます。殿は西軍と戰はうとの思召しでございますれば、お勝手になさいませ、私はどうしても東軍と戰ひます。』

と、いふ事をききません。傍にゐた者が、

『家來として主人の命命をきかないのはよくない。東につくのは今はじまつた事ではない。』

と、いひますので、松野も仕方なく兵を率ゐて澁々山を下りましたが、

『武士の意地として、今までの味方が討たれるものか。』

と、少しも戰をしようとはせず、戰のすんだ後、髪を削つてお坊さんになつてしまひました。これは心の立派な人であつたのであります。

山を降つた秀秋の軍は、その下にゐた大谷吉隆の陣をさして斬り入りました。吉隆は、

『さてはいよ〳〵裏切つたか。家康は憎いとは思はないが、秀秋こそ憎い奴だ。それ備へよ。』

と、眼が見えませんから籠に乘りながら戰ひました。大將は名將、兵士は勇敢、無二無三に突きかゝりますので、秀秋の軍は一度に逃げてしまひました。けれども、秀秋が東軍についたのを見ますと、脇坂、朽木、小川、などの兵もみんな東軍について、みんな吉隆めがけて攻めてきますので、吉隆の兵は大方討たれ、吉隆も危くなつてきました。吉隆はキリ〳〵と齒を切みながら、

『おのれ、三年の内にはこの恨を報ゆるぞ。それにしても、たうとう徳川の世とはなつたぞ。運なれば仕方もあるまい。』

と、やがて自殺いたしました。

秀秋等が東軍につき、吉隆が死んだ後は、東軍はにはかに勢を盛りかへしてきました。それと一緒に西軍の勢はすつかりなくなりました。

まづ第一に小西行長の陣がまけてしまひました。そこへ東軍は勢に乘じて總がゝりになつて押寄せてまゐります。三成も、

『今はこれまでだ、最後の一戰に德川の麾下に突き入つて勝負をきめよう。』

と、自分から二千の兵を率ゐて、家康の陣をさして進んできました。家康はこれを見ますと、

『あれこそ三成であるぞ。早く追ひ散らせよ。』

この時酒井忠勝は、

『敵の張本人であるぞ、俺と共に討死せよ。』

と、呼ばはりながら、蜻蛉切といふ槍を提さげて三成の軍をさして駈け出しました。

さすがの三成も忠勝の勢にはかなひません。少し退つて息をつぎました。そこへ黑田長政などがつゞいて寄せてきました。三成の家來の島左近、蒲生郷家などが奮戰いたしましたが、戰の運はもうきまつてしまひました。

總大將浮田秀家も、戰死と覺悟をきめて、

『戰のこの樣になるのも、秀秋、秀元の樣な不甲斐ない奴のお蔭だ。せめては太閤の御恩に報いたいぞ。』

と、馬を進めようといたしましたが、家來の者たちは、

『大將は、そんなに輕々しくなされてはなりません。とに角、國にお歸りになつて、岡山の城を枕として討死なされてもおそくはございません。』

と、諫めて國にかへらせました。

總大將はかくして國にかへりました。三成もつれて伊吹山にかくれてしまひました。

のこつてゐるのは、たゞ島津義弘の一隊でございます。

義弘は少しも弱らず、東へ東へと進んで行きます。家康はこれを見ると、

『島津勢は必死の覺悟らしいぞ、早く追ひ崩してしまへ。』

直政と、忠勝の二人は息もつがずに島津の軍と戰ひました。義弘の兵はもう五六百人しか殘つてをりません。

『この は徳川の麾下に攻め入れ。朝鮮までもその名を轟かした義弘の名を汚すな。』

と、馬をすゝめようとしましたが、家來たちは、

『頼朝殿以來の家をここで滅ぼしてはなりません。とに角、國へお歸り下さい。』

と、たのみます。しかし歸らうとしても、德川勢はもう伊吹山の方までみちてをりますので、歸る事さへも出來ません。それでは伊勢へ出よう。と大膽にも敵のまん中を突き切つて、伊勢から近江に出で、それから伊賀を越え大阪に出まして、ここから船で薩摩へ歸つてしまひました。

關ヶ原の戰はこれで終りました。黑田長政が、まづ出て來まして、お祝を申し上げました。家康は

『今日の大捷は全くあなたのお力でした。』

と、禮をのべました。秀秋、秀元の東軍についたのは、この長政の手柄であつたのであります。つゞいて大將たちはみんなお祝にきました。けれども、秀秋は出てきません。出てきたいのでありますが、出てこられないのであります。家康は使を出して秀

秋を呼びました。秀秋は小さくなつて出てきました。みんなが、その可愛さうな樣子を笑ひました。

家康はそれから西に進んで、佐和山の城を取り、十九日には近江の草津まで進んできました。

小西行長は、一旦伊吹山にかくれましたが、途中一人のお坊さんに逢つて、

『俺は小西攝津守であるぞ、お前は俺を德川殿の陣へつれて行け。降參するのは卑怯の樣であるが、俺は切利支丹の信者であるから、自殺は出來ない。しかし、生きて行くべき所もない、早くつれて行け。その時にはお前も重い褒美が頂けるであらうぞ。』

お坊さんは、十九日草津の陣へ行長をつれて行きました。

三成は、三人の家來をつれてこれも伊吹山に入りましたが、その途中で三人の家來

にわかれ、たゞ一人佐和山の城へ向ひました。十八日に城が落ちましたので、仕方なく簑笠で姿をかくし、どこともなくトボ〳〵と歩いて行きました。お腹がすいてまゐります。眼がくらみさうになつてきます。しかたなく稲の穂や、木の實をたべましたので、たうとうお腹を悪くしてしまひました。やがて生れ故郷の淺井郡の脇坂村まで行きました。自分の村ではありますが、何をいふにも今度の張本人でございますから、誰もよせつけてはくれません。足は疲れ、腹は痛み、そのまゝ田の畔に倒れてをりました。折から一人の百姓が通りかゝりました。ふとその顔を見ますと、何となく見た様な顔であります。

『お前は與次郎ぢやないか。』

百姓はヂッと三成の顔をながめました。そしてハラ〳〵と涙をこぼしました。

『佐吉さんか。』

三成も幼な名を呼ばれますと、昔なつかしさに我知らず涙が出てまゐります。その昔お寺にゐた時、この與次郎とは仲のよい友達でありました。螢狩り、蜻蛉つりの昔

がチラリと三成の眼をかすめました。その後、一方は大名となり、天下をくつがへす程のこの大戰の大立者となり、一方はそのまゝに大きくなつて、やつぱり泥にまびれてゐる百姓。でも戰は敗れ、城はなくなり、病に苦しむ今となつては、三成もまたこの昔の友の情にすがらねばなりません。

『おゝ、昔の佐吉であるぞ。』

『さてもお氣の毒な。世が世であれば、俺はあなたの顔さへ見られない身分。見ればお腹もすいていらつしやるご様子、わしの家まで　て下さるか。』

と、親切に自分の家へつれて行きました。三成はここで二三日を送つてゐましたが、たうとう田中吉政のために捕へられてしまひました。やがて吉政は三成をつれて家康の所へ行きました。その時家康は大津にをりました。

三成が家康の本營の前に座つてをりますと、福島正則、淺野幸長、細川忠興などの大將が通ります。正則は三成を見ますと、

『貴様がよけいな戰を始めるから、そんなざまになつてしまつたのだ。』

ぞ。』

と、えらさうにいひました。これをききました三成は、

『貴様たちを召し捕つて、俺の今の様に縄をかけてやる筈であつたぞ。』

と、叱りつけましたので、さすがの正則も恥しくなつて、そのまゝすごすごと中へはいつてしまひました。

又少しおくれて黒田長政がきました。三成を見ますと、いそいで馬から下りて、

『お氣の毒な事になりました。寒くはございませんか、これなりと召して下さい。』

と、自分の羽織をぬいで三成にきせました。

小早川秀秋が、三成が來たとききますと、

『一寸行つて見てこよう。』

と、座を立ちました。側にゐた忠興が、

『よけいな事をなさいますな。』

と、止めましたが、秀秋は戸のかげから一寸のぞきました。すると三成は、

石田三成

『お前程の卑怯者は日本にないぞ、義理を知らない奴は。いつになつても人に笑はれるぞ。』

と、いひましたので、秀秋はまつかになつて逃げて行きました。

やがて家康は三成に逢ひました。家康は、

『ご不運にも、その様な身分におなりなされたが、決して恥ではございません。昔からいくらもある例でございます。』

と、なぐさめました。三成も心を和らげて、

『運命なれば仕方もございません。この上は早くこの首をお刎ね下さい。』

と、少しも悪びれた様子はありませんでした。家康はあとで、

『さすが三成は立派な大將だ。平宗盛の様な者とは段がちがつてゐる。』

と、ほめたといふ事であります。

あとで三成は本多正純にあづけられました。その時正純は、

『軍も敗けましたのに、何故自害もなさらず、捕へられましたか。』

と、尋ねました時、三成は、

『さて〳〵あなたは武士の心をお知りにならないのか、腹を切つて人手にかゝらないなどゝは葉武者どものいふこと。頼朝殿も土肥の杉山の朽木の中にかくれなさらうとも命を長らへなされて、源氏の世をお待ちなされたではないか。もしもあの時、大庭に捕へられなされたとすれば、定めしあなたは頼朝公をお笑ひなさるお心か。それでは大將の道を說いてもあなたにはお分りにならない。』

と、いつたといふ事であります。

安國寺惠瓊も京都で捕らへられました。それがまた大津の陣につれてこられました

この時、三成も、行長も、惠瓊もみんな粗末な着物をきてゐました。家康は三人に小袖を一重づゝ贈りました。行長は涙を流してよろこびました。

『私の樣な敵に、これ程のご親切、ありがたうございます。』

と、すぐにそれをきました。

惠瓊は、何の禮もいはず、

『ドレ〳〵着ませうか。』

と、それをきました。

三成はその小袖を見ると、

『誰がくれたのか。』

と、尋ねました、役人は

『上樣からでございます。』

『何だ、上樣？』

『はい、內府樣でございます。』

『氣をつけて物をいへ。上樣とは死なれた太閤樣の事であるぞ。どうして內府が上樣なのだ。』

と、そのまゝ小袖は見むきもせずに着ませんのでした。

十月の一日三人は京都へ送られました。役人は三人を京中引きまはして、三條の川原で斬りました。

その斬られる前、三成は喉がかはいてたまりませんので、水をくれとたのみましたが、水がありません。役人はしかたなく、

『柿がございます。これを召し上れ。』

と、いひましたが、三成は、

『柿は腹の毒だ。』

と、たべません。役人は笑つて、

『今斬られる者が、腹の悪くなるのが心配でございますか。』

と、笑ひますと、三成は、

『國の大事をなす者は、命のなくなるまで命は大切にしなければならないぞ。』

と、いつたといふ事であります。

戰を起したのが悪いといへばいへませうが、三成は死ぬるまで立派な武士でありました。

總大將の秀家は大阪まで歸りましたが、も一度軍をあげることも出來ず、薩摩の島津をたよつて行きました。

秀家は慶長八年までここにゐましたが、九年に八丈島に流されてしまひました。そしてここでなくなつたのでございます。

この戰で、天下の權利はすつかり家康のものとなりました。それでこの戰を天下分目の戰といひます。

一　豐臣　秀吉の後をついで日本を統一したのは德川　家康である。

二　家康は三河の人で岡崎の城　主であつた。

三　小さい時からいろ〳〵と難儀をしたので大變　利口であつた。

四　今川氏に屬してゐたが、義元の死んだ後　信長につき、後　秀吉について、關東を領して武藏の江戸に移つた。

五　秀吉の死後石田三成は家康の勢を悪んで上杉　景勝等と相談して家康を討たうとした。

六　家康は三成等と美濃の關ヶ原に戰つて、たうとう日本　中を從へた。これが慶長の五年の事であつた。

第三十七　徳川家康（つゞき）

一　鐘のたゝり

織田が搗き羽柴がこねし天下餅
骨も折らずに喰ふは徳川

誰かゝ、こんな面白い歌を作りました。骨を折らなかつたではありませんが、關ケ原の戰の後、天下は家康のものとなりました。慶長七年には從一位といふ高い位に昇り、八年には征夷大將軍となりました。家康は早くからこれになりたくてたまらなか

つたのであります。この時家康は六十二歳、將軍の御許が下りますと、その年江戸に歸つて幕府を開きました。その十年に將軍の役目を子の秀忠にゆづりまして、自分は今の靜岡に隱居をいたしました。

けれども家康の心配がまだ一つ殘つてをります。それは大阪にゐる豐臣秀頼でございます。秀頼は關ケ原の戰には自分から進んで兵を擧げたわけではありませんから、家康もそのまゝにしておきましたが、たとへ關ケ原の戰には家康に味方いたしましても、福島、淺野、加藤などといふ大名は豐臣の家來でありますから、やつぱり秀頼を主人と思つて大切にいたしてをります。もしも秀頼が徳川を恨んで兵をあげます樣な事がありましては、これらの大名をはじめ、日本中の大名は徳川につくよりも、秀頼につく方がきつと多いにきまつてをります。

しかも秀頼は位は正二位にまで進み、十一歳で内大臣となり、十三歳で右大臣にまでのぼつてをりますから、たとへ將軍であらうとも、その位に對しても尊敬しなくてはなりません。だから徳川にとつては眼の上の瘤でございます。

ですからなんとか無理難題をふきかけて滅したくてたまりません。けれども大阪の城は難攻不落の城、城の中にはお金や兵糧が山程蓄へられてあります。

家康はまづこの、軍に必要なお金からなくさせるのがよいと考へました。

これは秀吉がまだいきてゐる時の事であります。秀吉は京都に方廣寺といふ大きなお寺を建て、高さ十六丈の大佛を作らせましたが、それが地震でこはれてしまひました。それを秀吉が直さうと思つてゐる中に死んでしまつたのであります。

家康はそれに氣がつきまして、或時秀頼や、淀君に、

『太閤殿下のために、あの大佛をお直しになつてはいかゞでございますか。殿下はあの大きい佛様を木でお作りになつたのがこはれるもとでございました。今度はいかゝです、銅でお作りになつては。』

と、うまく親切らしくすゝめましたので、親孝行の秀頼は、家康に他の企みがあらうなどとは知りません。早速大佛鑄造にとりかゝりました。家康はしすましたと、かげでよろこんでをります。その鑄造が大方出來上つて、これから首を鑄かけようとしま

した時、火が、胴體の中にからくんでありました材木に燃えついて、折角鑄上げた胴が熔けてしまひました。そこで又その工事が一時中止となりました。すると又慶長の十三年に、家康は豐臣の家來の片桐且元を靜岡によんで、

『折角やりかけた大佛を、あのまゝにしておくのは惜しいではありませんか。あれでは折角の秀吉公の供養が供養になりません。そしてついでにあの時燒けたお寺も一つ立派に建ててはどうです。』

と、すゝめました。且元は大阪に歸つて、秀頼親子にその事を話しました。この時、大阪の方でも何だか家康が怪しいとさとりました。

『家康はどうして、大佛、大佛、と又してもすゝめるのだらう。いくら大阪にお金があるにしても、この大工事を行ふのは容易の事ではない。それ程すゝめる位ならばお金を自分の方からも出せばよいぢやないか。』

と、いふ者もありましたが、もうその頃の家康の威勢はたいしたものでしたから、うつかりそのすゝめに從はない樣な事があつては大變だと、片桐且元が世話役となつて

十五年の六月からその工事にかゝりました。

家康は秀頼に金をつかはせたばかりではありません。豊臣方になりさうな、加藤清正、福島正則その他の大名にも、それ二條の城を修理せよ、江戸城を増築せよ、静岡の城を作れよ、名古屋の城を築けよと、盛にいひつけます。或時正則は、

『かう城普請ばかりに使はれては困まるねえ。二條の城や、江戸の城位ならば我慢するが、その子供のために名古屋の城を作らせられたり、まだそれで足らず、お家來の井伊のために彦根の城まで手傳はされてはやりきれないぢやないか。』

と、愚痴をこぼしました。すると清正が、

『正則、あまり大きな聲でいふなよ、それが聞えると、大御所様が『それがいやなら戰をしろ』と仰つしやるよ。どうだ、貴公は國へ歸つて籠城が出來るか。』

そんなにいはれると正則も、

『成程な、俺よりは貴公の方が利口だわい、ハハハ……。』

そして翌日はやつぱり城普請。清正も槍を振つて賤ヶ岳をかけめぐつた程の元氣もなく、名古屋の城普請の時などは、朝鮮で鬼上官といはれた赤い陣羽織をチャンチャンコのかはりに着て、一生の武功を語る片鎌槍を、杖のかはりにつきながら、大軍を叱咤した口に木遣音頭を歌ひながら、人夫の指圖をしてゐました。

その中に慶長十六年になりました。大工事の大佛はまだ出來上りません。その年の春家康は京都まできました。この時使を大阪に送つて、

『長くお目にかゝりません。一度お目にかゝつてお話もいたしたいと思ひます。どうぞ京都までおいで下さい。それから一度參内をされてはいかゞでございますか。』

と、申しました。この時秀頼は、もう十九歳になつてゐました。

ところが淀君は、

『家康にどんな惡計があるのかも知れない。』

と、秀頼の京都へ行くことを承知いたしませんでしたが、加藤清正、淺野長政などがいろ〳〵とすゝめて、

『今家康公の言葉に反いては、かへつて仲のわるくなる基でございます。それでは參

内をいたしますことは日數も長くなることでございますから、それはお止めになつてたゞ家康公にお目にかゝり、そのお歸りに、父上の御墓にお參りなされてはいかがでございます。私たち二人がきつとお引受けしてお守護りいたします。』

と、いひましたので、淀君もこれを許しました。

三月の二十七日秀頼は大阪を出ました。淀川を舟でのぼつて、あくる日二條の城へむかひました。その籠のわきには清正と、長政とが、歩いてお供をいたしてをります。清正も淺野も大大名、それが主人なればこそ、足輕の樣な姿でお供いたしたのであります。その時、京都の街の人たちは太閤樣の昔なつかしく、

『それ秀頼樣のお通りだ。』

と、みんな外に出て行列をながめましたが、昔にかはつて、秀頼の御供はたつた百人ばかり、

『かはればかはる世の中だ、何といふおいたはしい事なんだらう。』

と、人々の眼には涙が光つてをりました。秀頼は二條の城で家康に對面して、その日

すぐ大阪へ歸りました。

清正はお供をすまして、家へかへりますと、懷から短刀を出して、

『私は今日、少しは故太閤の御恩に報ゆることが出來た。』

と、いひながら泣いたといふ事であります。

家康はこの日秀頼を殺すほどの積りはしてをりませんでしたが、逢つてよく秀頼の樣子をみよう。馬鹿で別段構ふ程のものでなければすて、置いてもよいが、と考へてゐたのであります。ところが逢つてみますと、中々立派な若大將でございます。おとなしい中にしつかりとした樣子は、成程秀吉の子として恥しくはありません。

『おゝ實に立派だ。他人の指圖を受ける樣な人ではない。』

と、感心もいたしましたが、それだけ

『これはすてて置くことは出來ない。』

と、思ひながら靜岡にかへりました。

さて京都方廣寺の工事は慶長十七年の春になつて出來上りました。まづ大佛殿の高

さは十五丈、東西が十六丈、南北が十七丈、大佛の高さは六丈三尺、奈良の大佛よりももつと立派に出來上りました。ついでに鐘も造らうといふ事になりまして、一萬七千貫の大鐘を鑄上げました。その鐘の出來ましたのが慶長十九年の春でありました。

さて、佛も、お堂も、鐘も出來ましたから、いよ〳〵佛樣の開眼供養をその年の八月三日にするといふ事になりました。時分はよしと、家康は今まで掛けておいた罠をぐいつと引つぱりました。そのひつぱり方がどうだつたかと申しますと、鐘の銘に『國家安康、君臣豐樂、子孫殷昌』といふ目出たい文字がかいてありました。これは清韓といふ智識の深いお坊さんの作つたものでありましたが、家康にいはせますと、

『これはとんでもない。この德川の滅亡を呪つた文句である。承知が出來ない。』

と、いふのであります。勿論こんな事を家康に敎へましたものは林道春といふ學者であります。學者もかうくだらなくなつては困つたものでございます。

そこで家康は、

『その開眼供養はしてはいけない。』

と、止めてしまひました。又その止め方がひどいのであります。をりもあらうに、すつかり仕度が出來て、千人といふお坊さんがあつまり、何萬といふ見物人が京都に集まつて、明日がその日であるといふ八月の二日の日であつたのであります。

世話役の片桐且元は、びつくりして、

『鐘の銘は、決してそんな事をかいたのではございません。そのいひわけはあとでいたしますから、せめてこの供養だけは行はさせてくれ。』

と、たのみましたが、德川の方ではどうしても『よし』といつてくれません。秀賴や淀君の殘念がるのはもとより、且元は腹でも切つてしまひたいと思ひましたが、ここで死んでも何にもなりません。その文をかいた清韓と二人で、急いで靜岡まで家康に辯解にまゐりました。

ところが、家康はわざと逢はず、前に三成に『お前には大將の心はわからない。』といはれた本多正純がこの二人に逢ひました。清韓はまづ、

『それは思ひもよらない難題でございます。』

秀頼公におかれてはもとより、私たちは德川家に何の恨も持つてをりません。それにどうしておいひになる樣な不吉の銘を作りませう。もし國家安康といふ句が家康公をお呪ひする言葉でございますれば、その次の君臣豐樂といふ字は豐臣家を呪ふ言葉と考へねばなりません。豐臣家が豐臣家を呪ふ樣な馬鹿なまねはいたしませんどうぞよくお考へ下さい。』

と、いひましたが、正純は、

『いやさうではありますまい。君臣豐樂、子孫殷昌、は豐臣を君として、その子孫の殷昌を樂しむといふ文句である。』

と、どうしてもききません。且元も、

『淸韓和尙の申します通り、豐臣家におきましては、少しも德川家に對して、不和をはかる樣なことはございません。』

と、いひました。この事を正純が家康に申しますと、家康は、

『それでは早く豐臣家が、德川家に對してへだゝつた心のないことを見せたがよからう。』

と、正純にいはせました。且元は、

『それではどういたせばよいのでございますか。』

と、問ひますと、正純は、

『それはあなたが何とか考へたらよいでせう。』

と、相手になりません。

大阪でも秀頼と淀君がこの事について大層心配しまして、淀君の小さい時の乳母の大藏局と正榮といふ尼樣の二人を靜岡に送つて、

『いろ〳〵御心配をかけてすみません。』

と、おわびをさせました。すると家康は早速二人にあつて、

『そんなに心配をするな。どうだ秀頼殿も淀君殿もお達者か、うむ、それは結構だ。豐臣と德川とは切つてもきれない親類ぢや、秀頼にわるい心のないことはよく知つてゐる。まあよい、そんなに心配をせずに、ゆつくり江戸見物でもして歸へつたら

よいだらう。』

と、わざとニコ〳〵しながら二人をかへしました。二人も安心して、それから江戸見物をして大阪にかへりました。

この二人に家康がニコ〳〵したのもずるい考からなので、且元の方へはやつはりきびしく、『さあ、どうする　どうする。』とせめますので、且元も仕方なく、

1　淀君を江戸へ送ること、

2　秀頼が江戸に住居すること、

3　秀頼が大阪の城を出ること、

の三つの中どれかよいでせう。とききますと、正純は

『その中の一つをどれか行へば、家康公のお怒りもなはるでせう。』

と、いひました。且元はそれでは大阪へかへつてどれにするか相談しませうと、静岡を出ました。

途中近江で且元は大藏局たち二人に追ひついて、この事を話しますと、二人は驚いて、

『私たちの家康公におあひした時には、けつしてそんな事を仰つしやらなかつた。これはきつと、且元は徳川方について、豊臣家を滅ぼすつもりにちがひない。』

と、且元よりも先きに大阪へ歸つて、その事を秀頼親子に話しました。すると淀君は

『にくいのは且元だ。わたくしを女とあなどつて江戸へ送らうとは何事であるか。』

と、怒ります。秀頼も、

『お母様を江戸に送る位ならば、この城を枕として討死する方がよい。』

と、腹を立てました。それとは知らない且元は、大阪につきましたが、淀君は逢はうともいたしません。秀頼もそんな事はきくことは出來ない。と相手になつてくれません。且元はどうしてよいかと困つてゐます時、大藏局の子の大野治長等が、且元を殺してしまはうと、いひ出しましたので、且元も仕方なく、自分の城の茨木へ歸つてしまひました。

且元は大阪方で大切な家來である上に、智恵分別の深い人でありましたから、家康

はまづ且元を大阪から出して、その勢を弱くしようとして、こんな惡企みをしたのでありました。

かはいさうに、大阪の方の運命はまことにあぶないものとなつてきました。

二　桐の落葉

大阪の方ではたうとう兵をあげて、徳川と戰ふことにきめました。まづ加藤、福島毛利、黑田、池田、前田、島津など豐臣家に緣の深い大名たちに手紙を出し、又日本中の浪人に大阪に集る樣に觸を出しました。けれども大名たちは關ヶ原の戰以來みんな徳川氏についてしまひ、その上、戰や、城普請のためにお金をすつかりなくしてゐるのでありますから、一人も大阪方に味方するものはありません。たゞ關ヶ原の戰爭以來浪人になつた侍たちが、續々大阪に集つてきました。眞田幸村、後藤基次、塙直之、薄田兼相など九萬人。誰も彼も俺は天下の豪傑である、と思つてゐるのでありますから、その勢はなか〳〵盛でございます。

家康は『うまく行つた』と十月に靜岡を出て京都の二條の城まできました。秀忠も十一月の十一日に伏見の城につきました。その十五日に二人は京都を出て、住吉にまで進みました。

大阪の城は浪人ばかりではありますが、中々あなどるわけにはゐゐりません。中でも、眞田幸村といふ樣な軍上手の人がをります。家康はどうかして、この幸村を味方にしたいと使を幸村の所へ出して、

『徳川方へつくなれば、もとの信濃で一萬石をあげよう。』

と、いつてやりました。この眞田幸村は、關ヶ原の戰の時、お父さんの昌幸と一緒に信州の上田の城に籠つて、徳川秀忠が中山道を通つて關ヶ原に向ふ三萬八千の兵を、ひつたりと止めて、たうとうその戰に會はしめなかつたのであります。關ヶ原の戰の後、紀州の九度山に閑居してをりましたが、こんどの戰に大阪方について、華々しく徳川方と戰はうとしてゐるのであります。

ですから、家康のこの使にあひましても、

『私はもう豐臣家について一方の大將にまでなつてゐるのでございますから、御召にあづかることは出來ません。』

と、斷りました。家康は

『それでは信濃一國を與へるから、こちらへついてくれないか。』

と、いひましたが、それでも幸村は、

『有難たう存じますが、利益のために約束をかへましては武士の面目がたちません。もしも兩軍が和睦する樣な事がありましたら、信濃一國はいりません。たゞ食べるだけのものをいたゞけば結構でございます。それまではたとへ日本を半分下さつてもまゐりません。』

と、斷りました。これには家康も何とも出來ませんでした。

その中にも德川勢はだん〳〵と城に近よつて行きました。しかし日本一の名城はそれ程易々とは落城しません。その上、眞田、後藤などといふ智勇兼備の人たちがをりますから、戰へば戰ふ程味方は殺されるばかり、進むことも出來なければ、さればといつて逃げて歸るわけにもまゐりません。その時分の人が、意地の悪い歌をつくつて、

東武者破れ車の如くにて、引くも引かれず乘りも乘られず。

と、いつて笑ひました。そこで家康はまた考へました。まづ大砲をうつことの上手なものにいひつけて、城の天主閣をめがけて盛に砲擊させました。城の中には淀君はじめ大勢の女がをりますから、その大砲の丸が頭の上を飛んだり、櫓にあたつたりしますと、キャッキャッといつて恐がります。かうして十分こはがらした上で、家康は

『今に天主閣の下へ孔をあけて城を崩してしまひます。早く今の中に和睦しなさい。』

と、いつてやりました。淀君は、もうこはくてこはくてたまらなかつた所へ仲直りの使がきたのですから、一も二もなく仲直りをしようといひだしました。秀頼も仕方なく、

『豐臣の領地、大阪の城はもとのまゝ秀頼のものであること、集まつた兵士もこのままにしておくこと。』

と、いふ豐臣家にとつて、それ程損でない條件を持ち出しました。

しかし家康はちやんと他に企みがあるのでありますから、何ともいはずによし〳〵と承知しました。この約束の證據は徳川の方からは十二月の二十一日に豐臣の方へ送り、二十二日には豐臣の方から徳川の方へ送りました。豐臣の方からの使は、名高い木村長門守であつたのであります。

そして家康の企みといひますものは、前に秀吉から『この大阪の城を落すには總濠を埋めればすぐ落ちる。』といふ事を聞いてゐたのでありますから、それをしようと考へてゐるのであります。けれども、そんな事を和睦の條件に入れますと、大阪の方で承知しないにきまつてゐますから、談判をしてゐる時には、わざと何でもない樣に、『私たちもわざ〳〵關東からきて、何の土産もなしに和睦するのもつまらないから、何かその印をのこさして下さい。幸和睦が出來ました上は、兩方とも戰爭する樣な事もありますまいから、城の總濠を埋めて下さい。それも、大阪の方に手數をかけてはなりませんから、私の方で埋めます。』と、何でもなささうな樣子でいひました。けれども大阪の方では城の總濠を埋められ

ては大變ですから、いやだと云はうとしましたが、淀君は、たゞ一日でも早く和睦しておきませんと、大砲を擊たれては大變ですから、何もかも承知してしまひましたのでございます。

この戰は冬にあつたのでございますから、これを大阪冬の陣といひます。

すると、その翌日の二十三日から本多正純が指圖役になりまして、總濠を埋めかけました。この總濠といひますのは、城の一番外側にある濠の事でありますが、正純は數萬の兵士にいひつけてどし〳〵濠を埋めてしまひ、總濠を埋めると、こんどは內濠まで埋めにかゝりました。これを見た大阪の方では、

『それは約束がちがふ。內濠を埋める約束はしない。』

と、いひましたが、正純はそらとぼけて、

『總濠とはすつかりの濠のことです。私はさう思つてをります。』

と、いひます。大阪の方では、

『そんな馬鹿なことがあるか、總濠とは外側の濠をいふのだ。』

と、せめますが、正純は、

『それでしたら、その事を私の父に申して下さい。私は父の命令で埋めてをるのですから。』

と、ずん〳〵内濠も埋めて行きます。大阪方では早速使を京都にやつて、正純の父の正信にあつて、その事を、いひますと、

『左様でございますか、私の息子は馬鹿でそんな事をいたしたのでありませう。早速家康公に申し上げてお返事いたしたいのでございますが、あいにく家康公は、この頃お風邪をひかれておやすみ中でございますから、お氣の毒ですが、二三日お待ち下さいませ。』

と、家康はすこしの風も引いてゐないのに、そんな事をいつて使をまたせてをきました。その中に、正純は大阪城の内濠までみんな埋めてしまひました。馬鹿をみたのは大阪方でございます。うまく行つたと喜んだのは家康でございます。

その後、家康は正信からこの話をききまして、わざと眞面目らしく、

『それは大阪の方が怒つてゐるにちがひない。早くお前が行つて秀頼公にあやまてつこい。』

と、いひましたが、正信の大阪に行つた時分はすつかり埋まつて、一人の人夫も殘つてゐない時でございました。正信は『よし〳〵これなら大丈夫、いくらあやまつてもよい。』と

『まことにわるい事をいたしました。全く私の息子が考へちがひをいたしましたので申譯がございません。しかし、もうこんなに埋まつたからには、もう一度掘りかへすことは大變でございます。その上ご兩家和睦なされた上は、これもきつとお親しみの長くつゞきます兆かとも考へられます。惡い所は私から十分お詫びをいたしますから、どうぞ御堪辨をお願ひいたします。』

と、やたらに頭をさげて、かげてペロリと舌を出して歸つてきました。

大阪の方は、はじめて家康の惡企であつた事を知りましたが、もう何ともすることが出來ません。そのまゝ泣寢入りになつてしまひました。

その時は泣寝入りになりましたが、腹の蟲はどうしてもおさまりません。その翌年秀頼はまた兵をあつめました。集まつたもの總勢十五萬。けれども、濠のないお城は鎧を着ない武士の様でございます。

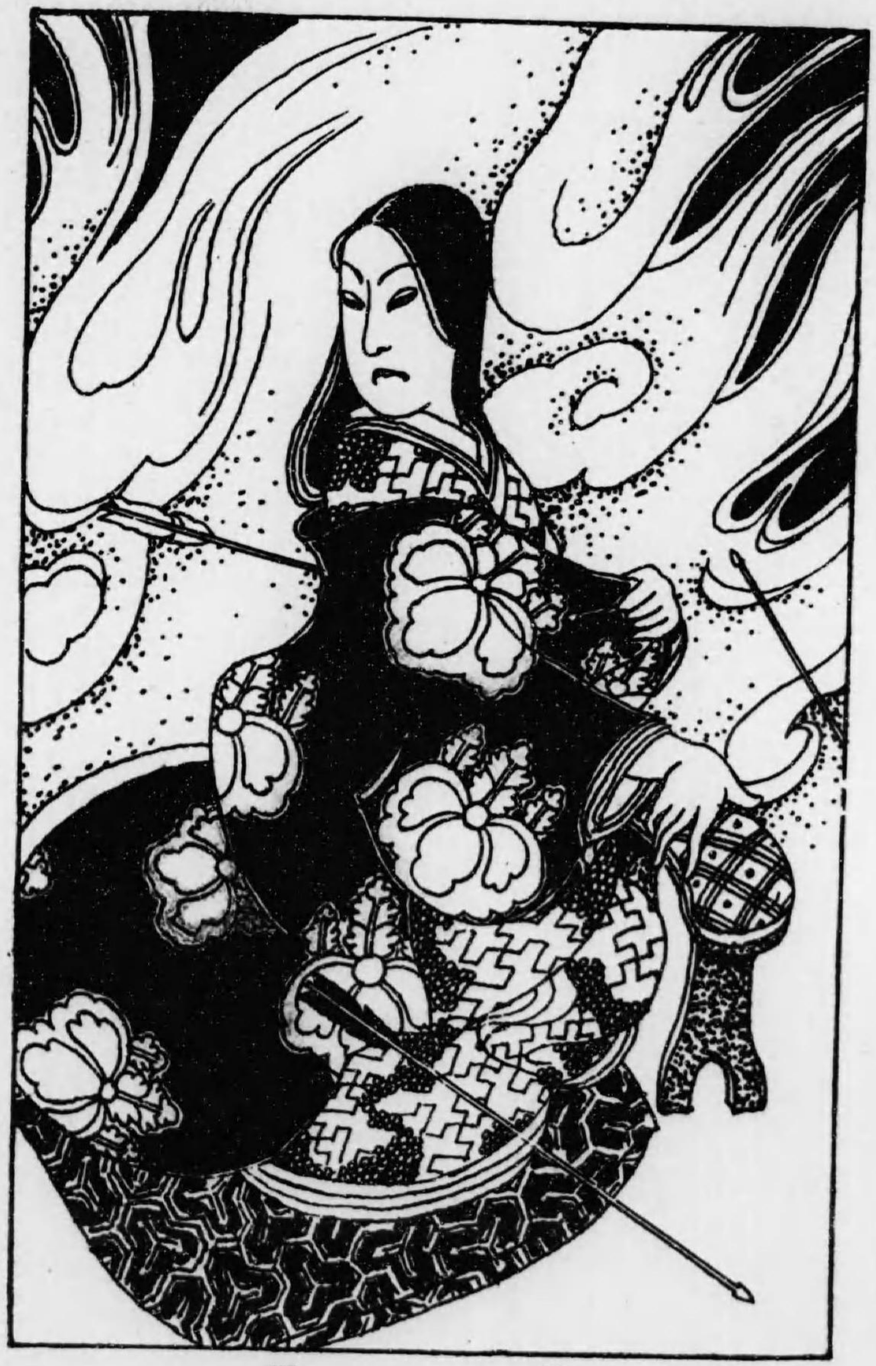
その事が關東に聞えますと、家康は、待つてゐたとばかり喜びまして、

『こんどこそは豊臣を滅してくれるぞ。』

と、その四月に秀忠と二人で、これも亦十五萬の大軍を率ゐて大阪へ攻め上つてきました。大阪方の眞田幸村、後藤基次、薄田兼相、木村重成等は、力の限り方々で戰ひましたが、もう冬の陣程の力もなく、後藤、薄田、木村といづれも勇ましい戰死をとげてしまひました。幸村も、

『さあこの上は最後の合戰をして、豊臣の運命をきめよう。』

と、覺悟いたしました。それには秀頼の出陣であります。もしも秀頼が馬を進めたならば、たとへ東軍についてゐようとも、藤堂、伊達など豊臣の恩になつたものは、きつと猛しく戰ふことは出來まい。その時には家康の本陣に攻めこんで、あの白髪頭を



淀君

取つてやらうと考へたのであります。

ところが家康の方でも、もし秀頼が馬を進めてきては大變だと思ひました。

『もし秀頼が出てきたならば、或は秀頼に味方するものが出來るかも知れない。よし味方しなくとも、きつとうまく秀頼を進ませて自分の本陣に近けるにちがひない。その時には、この疲れた兵で、死者狂ひの大阪方に勝つことは出來ない。』

と、又々知恵をしぼり出して、

『大阪の方には秀頼公に出陣をさして自分が助からうとする者があるらしい、秀頼公は私の孫の婿でもあるから可愛ゆくてたまらない。どうかして助けたいと考へてゐるのだ。それに秀頼がもしも出陣する様な事があれば、助けたくても助けることは出來ない。どうか出陣させないでくれ。』

と、手紙をかいて、大野治長に送りました。大野治長は少しも偉い人ではありませんが、淀君のおきに入りですから、大阪では治長の勢はたいしたものでございます。ところがこの大野治長が、早速家康の罠にかゝりまして、

『すると眞田は、自分の命を德川に助けてもらはうとして、秀頼公を出陣さして、德川の方へ渡してしまふ考らしい。』

と、どうしても秀頼を出陣させません。幸村は、『さうでない。』といろ〳〵にいひわけしましたが、治長はきき入れませんので、もうこの上は仕方ないと、奮戰して死んでしまひました。

今まで大阪方の戰上手であつたのは、この幸村一人の謀であつたのですから、今幸村が死にましては、一日だつて支へることは出來ません。その中に、城の中の者で、德川の方へついた者が城に火をつけましたから、その翌日、卽ち五月の八日に落城いたしました。秀頼も、淀君もみんな自殺いたしました。この時秀頼は二十三歲。

旭の昇る樣な秀吉の勢も、ここにたうとうその終をつげました。立派な桐の葉の紋も、おしや、大阪の地に散つてしまひました。

たゞ一人助かつたのは、秀忠の女で、秀頼の妻となつてゐました千姬でした。これは、落城の前に東軍に渡されたのであります。

この戰がすみますと、家康は、京都にある秀吉のお宮を毀してしまひました。どうしてこんな不人情な事をしましたのか。大方、このお宮をのこしておいては、秀吉の事を思ひ出すものがあつてはいけない。とでも思つたのでせう。

その翌年、家康は七十五歲で靜岡でなくなりました。これは鯛の天麩羅があたつて死んだのでありました。豐國大明神の社を毀した家康は、東照大權現といふ神樣になりまして日光山に祭られました。

一　關ヶ原の戰の後、家康は征夷大將軍になり、幕府を江戸に開いた。

二　家康は將軍となつた後も大坂にゐる豐臣秀頼が心配であつた。

三　家康は秀頼を滅ぼさうと、京都に大佛を造らし、鐘をつくらしたりなどして、大阪の金をなくさせようとし、鐘の銘に苦情をつけて秀頼に兵をあげさせた。

四　大阪の戰は冬の陣、夏の陣と二度つゞいて豐臣氏はたうとう滅んでしまつた。

五　豐臣氏の滅んだ翌年、家康は安心して靜岡でなくなつた、その時七十五歲であつた。

六　家康の墓は下野の日光山にあつて、そこには東照宮といふお宮があつて、家康を祭つてある。

第三十八　徳川家光

一　生れながらの將軍

二代將軍秀忠には竹千代、國千代といふ二人の子供がありました。兄の竹千代は性質がまことに應揚で、何事にもコセつきません。ところが國千代の方は耳から鼻につきぬけてゐるとでも申しませうか、何事にもよく氣がついて、愛嬌もよく、秀忠夫婦も

『ほんとに國千代は竹千代よりも悧口だ、三代の將軍には國千代がよからう。』

と話し合つてをりました。兩親がさう考へられるからには、家來も召使も、竹千代よりは弟の國千代を大切にして、國千代樣、國千代樣と、大變評判がよろしい。

ところが竹千代の乳母に春日局といふ賢い女がありました。

『もしも國千代樣がお家を嗣がれる樣なことがあつては、お家の亂れる基、それがやがては天下の亂れる基ともなるかも知れない。この上はお祖父樣のお力によつて、おきめしていたゞくより方法はない。』

と、靜岡に行きまして、家康公におたのみいたしました。家康は、

『それはいけない。早速江戸へ參つて秀忠夫婦のものによくいひきかすであらう。』

と、何の通知もなく、江戸へ來ました。江戸の城では、にはかに家康のおいでときいて、大あわてをいたしてをりまする中に、家康はずつと御本丸におつきになりました。

秀忠も驚いてお迎へしますと、家康は

『俄に思ひ立つて出てきたので、さぞ驚いたらう。いや別段用事があつたわけではないが、久しくあはなかつたものだから、竹千代に逢ひたくて來ました。どうです丈

夫でをりますか、すぐ呼んで下さい。年がよると孫が何より可愛いいもので。』

などと、別にちがつた様子もありませんので、秀忠もホッと息をついで、竹千代兄弟を呼びにやりました。まもなく、竹千代と國千代とがお母様につれられて家康の所へ出てきました。その時、家康と秀忠とは一段高いお座敷にすわつてをりました。この一段高い所は家來たちの上る所ではありませんので、將軍より外の者はその下の低い所からお目にかゝつたり、お話をきいたりするのでございます。

竹千代も、國千代もその一段下のお座敷に手をついて、ご挨拶をいたしました。すると家康は、

『竹千代よ、おゝなか〳〵大きくなつたな。さあここまでおいで。』

と、上の間へよびよせました。竹千代がその上の間へ上りますと、國千代も一緒に上らうとしました。すると家康は、

『あゝこれ〳〵。』

と、手をふりながら、

『國はそこでよい、ここは將軍様のお座敷だ、國はこゝへ上つてはならない。』

と叱りました。これをききますと、秀忠夫婦はビクリといたしました。わけて夫人の胸は急に引きしまる様に覺えました。家康はそれと氣がついてゐますが、知らぬ顏で、竹千代を側近く坐らせて、

『さあ、お爺さんがお菓子をとつて上げよう。うむ中々御行儀もよい、さあここで召し上つてもよろしい。』

と、うれしさうにしながら、又別の紙にお菓子を三つばかり包んで、

『國もそこでお兄様のお相伴をしなさい。』

と、その菓子を投げてやりました。かうされますと、夫人の目にはもう涙がたまつてをります。家康は頓着なしに、

『竹千代よ、お前もやがては將軍様になるのぢや、どうだ勉強をしてゐますか。何に？劍術を習つてゐる……それは結構だ、道理でしつかりと落付いてゐる。お前の名はこのお祖父さんの小さい時の名だ、それをお前にやつたのだよ。どうだ知つてゐ

るか。』

と、いろ〳〵お話をいたしました。

あとで家康は秀忠夫婦と御飯を一緒にたべながら、

『お前たちは國千代を大層可愛いがつてゐるといふ事だが、いくら可愛がつても將軍はあれに讓つてはならない。順序をまちがへることは國の亂れるもとぢや。それはよく氣をつけてもらひたい。』

と、注意いたしました。それで秀忠夫婦も仕方なく竹千代を世嗣ときめました。すると召使の者たちは、早速召使根性を出しまして、

『だから私ははじめから竹千代様がお偉いといつてゐましたわ。』

『いや私もさう思つてゐた。』

と、誰も『國千代様はお利口だ』といふ者がなくなりました。いつの世にも勢のよい方につかうとするのは、愚な人の心でございます。

それからも春日局は、一生懸命に竹千代を立派に育て上げました。それがためこの

竹千代が第三代將軍となりました時、この局を大奥の取締としました。そしてその勢は大名をしのぐ程でありました。後局は從二位の位にまで上りました。

竹千代は十七歳で元服をいたしまして、名を家光と改めました。元和九年家光は二十歳で將軍職をつぎましたが、春日局の嚴しい教へを受けた程あつて、實に立派なそして剛膽な將軍となりました。

これまで德川氏は、家康が將軍となり、秀忠が將軍となりましたが、前から德川の家來であつた大名はとに角、さうでない多くの大名（昔から德川の家來であつて、大名となつた人たちを譜代の大名といひ、さうなく秀吉や信長時代又はその以前からの大名を外樣大名といひました。）即ち外樣の大名たちは、德川の勢がつよくなつたからそれに從ひましたが、もとをいへば家康や秀忠のお友達であつたり、或は德川よりも强かつた大名たちでありますから、家康が將軍になつてから後も、何かにつけて遠慮をいたさねばなりません。ですから、その大名たちが江戸へ出て來ます時には、品川や、千住の方まで將軍から迎ひに行きました。品川の八ツ山の上にあつた御殿や、

小石川の白山御殿などはそのために使つたご殿であつたといふことであります。

ところが、家光が將軍になりましたその年の秋のことであります。家光は外樣大名たちを城の中へ呼びまして、

『私の父や祖父はあなた方と昔はお友達であつたでありませうし、天下を定めるについてもあなた方のお力を借りたために、あなた方にも遠慮があつたでありませうが、私は生れながらの將軍でありますから、あなた方にも少しも遠慮なく譜代大名と同樣にいたしたいと思ひます。もしそれが御不服でありましたら、今から三年の間お暇をあげますから、勝手にお國へお歸りになつて、戰のご用意をなさいませ。この家光がお相手をいたしませう。』

と、きつぱりいひ渡しました。かういはれますと、今まで心の中で德川を恐れてゐない大名も、『それでは戰の用意をいたしませう。』などといふ者は一人もありません。皆恐れ入つてそこを引きさがりました。

恐れ入りますと、こんどはうつかりした事をしては、幕府の方から、

『お前は幕府のいふ事をきかないから、領地を取り上げてしまふ。』

などといはれては大變ですから、どうかして

『私は決して幕府に叛く考は持つてをりません。』

といふ證據を見せたいと、妙な事をはじめました。それは、參勤交代といふ事であります。この參勤交代といふ事は自分の妻子を江戸に置いて、一年の間は自分も妻子と共に江戸にすみ、その次の一年は妻子を江戸に殘して國にかへつてゐるといふ仕方であります。勿論、國中の大名が一度に皆江戸にをり、次の一年は揃つて國にかへつてはこまりますから、半分程の大名が江戸にゐる間は、その他の半分程の大名は國にかへつてをり、その國にゐた大名が次の年江戸に來る時には、今まで江戸にゐた大名は國に歸るのであります。

この事は、關ヶ原の戰の後加賀の前田利長がその母を江戸に置いて質としたのにはじまり、次に薩摩の島津家久が妻子を江戸に置いて、德川に二心のない事を示したにはじまりましたが、その後大勢の大名たちも、だんだん命が惜しく、領地が惜しく

なりましたと見えて、これに見習ふ者がだん〴〵とふえ、家光の時になりましては、大名は誰も彼もさうしなければならない規則になつてしまつたのであります。

この參勤交代をいたしますと、第一大名が國へかへつて謀叛などを考へてゐる暇がありません。第二に謀叛などを企らんではその可愛いい妻子が殺されてしまひます。第三に一年がはりに遠い國から大勢の家來を連れて、江戸へ行つたり歸つたりいたしますと、お金も從つて入りますから、お金のかゝる戰爭なんか出來ないのであります。ですから幕府にとつてもまことに都合よく、德川幕府が二百五十年もつゞいたのは、この參勤交代をさしたお蔭であるといつてもよいのであります。

尙大名が德川幕府に叛くことの出來なかつた一つの原因は、大名の置き方を、外樣大名はなるだけ江戸より遠い所に置き、又外樣大名と外樣大名との間には、譜代大名をはさんで置いて、いつもその見張り役をさせましたので、一人の大名が謀叛をよし考へたにしても、それを行ふ事が出來なかつたのであります、

二　海を越えて

日本の人は昔から、いたつて元氣な氣性を持つてをりました。高い山を越えても、遠い海を越えても、どこにでも自分の住所を求めました。それは素盞嗚尊が朝鮮へ往來をなされ、火折尊が遠い海の國に行かれ、神功皇后が御婦人の身で三韓を征伐なされた事などについてもわかるのでありますが、それが足利氏の頃になりまして日本の中で志を得ない武士たちはめい〳〵仲間を作つて、小さい舟に乘つて、朝鮮から支那、もつと遠く南洋のあたりまで、至る所の海岸を荒してまはつた事がありました。それらの船には『八幡大菩薩』といふ旗をたててゐましたので、支那の邊では『八幡船』が來たといつて、この船の影を見ても慄え上つたといふ事であります。なぜかといひますと、乘つてゐる人間は二三十人から、多くて二三百人でありますが、その腰に横たへた日本刀を拔きつれて、斬り込んで行く時には、到底支那や朝鮮の人間が何百人ゐようとも、相手になることが出來ず、斬り殺されてしまつたからであります。

ところが、足利時代の末になりまして、世界の航路がだん〳〵と開けて、西洋の邊からも貿易をしようとする船が、遠く日本の近くまでも來る樣になりました。

天文十二年にはポルトガルの船が始めて日本へ來ました。はじめ薩摩に來たのでありましたが、まもなく肥前の領主松浦隆信は平戸といふ港を開いて、盛に貿易をいたしました。この貿易といふ事は誠に利益のある仕事でありますから、同じ肥前の大村純忠といふ大名も、佐世保灣の入口に港を開いてポルトガルの船を呼びよせました。

日本に鐵砲の始めて渡つてきたのもこの時のことでありまして、天文十二年大隅の種子ケ島にポルトガルの船が流れついて、その時その鐵砲を我國に傳へたものであります。ですから昔の鐵砲を種子ケ島銃といひます。

これと同時に、日本の人々も又外國貿易に出かけました。ところが、その前に日本の八幡船が至る所の海岸を荒しておりますので、日本の船が貿易に行きましても、やはり八幡船の仲間だと、どこでも相手になつてくれません。そこで秀吉は、それらの貿易船に『貿易をするために出て行く船である。』といふ書付を與へて、その書付には大き

な朱印が押してやりました。ですから、この書付を持つてゐる船を『御朱印船』といひました。

この御朱印船が支那から南洋方面、安南、暹羅の邊にまで行きまして、盛に貿易をいたしました。從つてそれらの地方には、日本の人が住居する樣になり、諸所に日本町が出來る樣になりました。

この時分外國へ出て行つた豪傑たちを二三紹介いたしませう。

天竺徳兵衛　これは芝居にまでしくまれてゐる有名な男でありまして、生れは播磨國の高砂の人で、十五の時に角倉了以の子の與一といふ人が朱印船を持つてゐましたので、これに乘り組み、二度までも遠く印度まで貿易に行きました。この時分印度の邊を天竺といひましたため、世間の人が、天竺徳兵衛といふ樣になつたのであります。

山田長政　この人は駿河の靜岡の人であります。若い時染物屋へ養子にもらはれて行きましたが、布を染めようともしないで、劍術を

習つたり、兵法を學んだり、一向家の役には立ちませんでした。その中に、

『日本の國なんかにゐても出世は出來ない。一つ外國に渡つて男らしい仕事がして見たい。』

といひ出しました。染物屋の爺さんはすつかり困つてしまひましたが、長政はそんな事に頓着なく、その時分靜岡の町にゐた、瀧佐右衞門、太田治右衞門といふ二人の商人が大きな船を作つて、臺灣に渡るといふことをききまして、早速二人の所へ行つて、

『私も一緒に臺灣に連れて行つて下さい。』

と頼みました。でも二人は、そんな仕事もしなければ、商法も知らない長政の樣なものを連れて行つても、何の役にも立ちませんから、

『仁左衞門さん（長政の名）お前さんはそんなとんでもない事を考へるより、爺さんのお手傳ひをしてゐてはどうです。私たちは商買のために行くのですが、お前さんは何のあてもなく高砂（臺灣のこと）なんかへ行つてもよい事はありませんよ。』といひましたが、長政はどうしても行きたくてたまりません。そつと大阪へ行つて、瀧

と太田が臺灣へ乘つて行く船へ乘りこんで、荷物のかげにこつそりとかくれてゐました。そんな事とは知らない瀧と太田の二人は、すつかり準備をととのへて、船に乘りこみ、錨をあげて、西をさして出て行きました。その途中長政は荷物のかげからごみだらけになつて出てきました。二人も長政の熱心に驚き、また今更歸すわけにも行きませんので仕方なく臺灣へ連れて行きました。

船が臺灣へつきますと、長政は自分の國へ歸つた樣に喜びながら、島へ上つて行きました。瀧と太田は

『妙な男ぢやないか、どうする積りなんだらう。』

『土人に殺されてしまふかも知れないよ。』

と話し合ひながら、自分たちの商賣をすましてまた日本へ歸つてしまひました。

あとに殘つた長政は、島を一通りまはつてみましたが、思つたよりも小さい島で、とても自分の名を擧げる樣な時も所もありませんでした。

『これはだめだ。しかし今更日本へも歸れまい。も一つどこかへ出掛けてみよう。』

と、便船のあつたのを幸と暹羅の國に渡りました。

ところが、その時暹羅には國王の弟が王様の位を奪はうとする騒動が起つてをりました。或日王様は兵を率ゐてこの戰に出かけました。長政は戰爭がしたくてたまらない男ですから、わざ〳〵途中に待つゐて、出陣の様子を眺めてゐました。ところがどうも兵隊がだらしない様子をして進んで行きますので、長政は思はず大聲を出してカラ〳〵と笑ひました。するとそれを見た王様は腹を立てて、

『失禮な、何をそんなに笑ふか。』

と、怒りました。長政は恐る様子もなく、

『兵士たちの様子を拜見いたしますと、どうも規律がなくて戰に勝てやうとも思はれません。それで笑ひました。』

と返答をいたしますので、王様はます〳〵腹を立てて、

『見れば他國の人間であるらしい。その他國の者が自分の兵隊を笑ふなどとは以つての外である。許すことは出來ない。』

と、家來にいひつけて、長政を縛つて牢屋へ入れてしまひました。ところがさて戰爭をして見ますと、何べん戰をしてもどうしても勝つ事が出來ません。王様も困りぬいた結果、長政を牢屋から出して、

『お前は戰に勝つ方法を知つてゐるのか。』

と尋ねました。長政はここぞと、

『ええ、私が兵隊を連れて戰に出ますれば大勝利は請合でございます。』

と答へます。王様もここでうつかりしてをりますと、王の位も取られてしまはうとする時ですから、

『それでは兵隊を貸してやるから一つ戰つてみよ。』

と仰せになりました。長政は、『それ、俺が今まで勉強した兵法はここで役に立つのだ。』

と、大いに得意になつて、早速暹羅にあつた日本町へ行つて、

『俺と一緒に戰に行く者はないか。一つ骨を折つてくれたら褒美は望次第だ。』

とふれまはりました。勇しい事のすきな日本人たちは『自分も行かう。』『私も行く、』

『拙者も出かけよう。』などと、大分志願兵が集つてきました。長政はこの兵隊たちと暹羅の兵とを合せて、皆に日本の鎧を着せ、

『日本の兵が王様を助けにきた。』

といふ噂を立てさせました。それを聞いた敵の者は、『さては』と、そろ〳〵怖氣がついてまゐります。

かうしておいて長政はまづ兵隊を三つにわけて、一隊は海の岸に、一隊は山の陰にかくしておき、自分は殘りの一隊を率ゐて敵に向つて進んで行きました。敵の方はどんなに多くの日本兵がきたのかと待つてゐますと、出て來たのは僅かばかりの兵隊ですから、

『何だ、これ位の兵に何も恐れることはない。』

とどん〴〵進んできました。長政は計略があるのですから、よい加減に相手になつて、よい頃を見て逃げ出しました。敵の兵隊は、それ進めと、追ひかけて參ります。長政はどん〴〵と逃げて、敵の軍勢がうまく進んで來たと思ふ時分に、『それッ』と合圖をいたしますと、山の陰からと、海の岸からと同時に伏兵があらはれて敵兵を兩方から挾み擊に攻めかゝりました。すると、今まで逃げてゐた兵隊もにはかに後がへりをして、三方から攻め圍んだものですから、敵は散々に敗けて、この騷動は難なく平定いたしました。『成程』と王様も大層およろこびになつて、長政を軍の大將にして、高い位をお授けになりました。

それから後馬來半島の南の方に謀反の兵隊が現はれた時にも、長政はこれを征伐してまた大勝利を獲ました。そこで王様は長政をこの馬來半島の南の方のリゴールといふ所の王様にいたしました。

けれども、長政もさすが日本が戀しかつたのですか、元和七年に使を日本に送つて、將軍秀忠に、暹羅の土産を獻じました。

さて、前に長政を臺灣にまで連れて行きました瀧、太田の二人はその後長政が暹羅でこの樣に出世してゐるとも知らず、寛永三年に暹羅の國に貿易のために出かけました。それを知りました長政は使を二人の所へ出して呼びよせました。二人はリゴール

の王様の使が來たのですら、もしや人違ひではあるまいかと心配しながらも、畏まつてご殿まで伺ひました。やがて長政の王様が、たくさんの家來を左右に從へて出てきました。二人は長政であるとは知りませんから、たゞ頭を地につける樣にして平伏いたしてをります。すると、

『おい佐右衞門さんに、治右衞門さん、俺は仁左衞門だ。』

と、何だか聞いた樣な聲がしますので、そつと頭を上げますと、それは長政ですから、

『これはまあ山田さんでございますか。』

と驚いたといふ事であります。その時長政は二人に大層ご馳走をいたしまして、

『俺がこの樣な身分になつたのも、元はといへば、あなた方のおかげだ。』

と、其の恩を謝し、いろ〳〵なお土產を持たしてかへしました。その後二人が日本へ歸る時長政は、暹羅の軍艦の繪をかいた額を、

『これを淺間神社に納めて下だされ。』

と、ことづけました。二人は歸つて靜岡の淺間神社に奉納いたしました。その額は長

くお宮の拜殿にかゝつてをりましたが、天明八年に火事で燒けてしまひました。でもその通りを寫した額が、今でもこの宮に殘つてをります。

その後長政はよく暹羅の王樣を助けて、その政治までも見てゐましたが、王樣の死んだ後、カツパンといふ惡い者が長政を邪魔にして毒を飲ましてしまつたといふ事であります。

大正四年に今上天皇陛下は、長政の日本の武勇を外國にまで擧げた功をおほめになつて、從四位をお贈りになりました。

濱田彌兵衞

この人も長政と同時に從五位を贈られました。

この人は長崎の貿易商の末次といふ人の船にのつて寛永五年に臺灣に渡つて、日本の貿易の邪魔をした和蘭人を懲した元氣な人であります。

この臺灣は今日は日本の領土になつてゐますが明治二十七八年の戰役までは支那のものでありました。ところが、ずつと昔はどこの領土ともきまつてをりませんでした。そこへ丁度家康が將軍になつた翌年位にオランダの船が來まして、今の安平港を自分

たちの出入する港と定めたいと考へました。

それが寛永の時分になりますと、臺南の邊に城を築いて、これにより臺灣の利益をオランダ獨りで占めてしまひたいと考へました。日本の船はその前からもうこの邊に來てゐたのでありますから、オランダがどんな考を持つてをりませうとも、やつぱり臺灣に出入いたします。オランダはかうして出入する日本の船が邪魔でたまりません。丁度その時、濱田彌兵衛の船が臺灣に行つたのでございます。

そこで、オランダ人は彌兵衛の船をはじめ、その他の日本の船の貨物をみんな横取りしてしまひました。彌兵衛等はその不都合を責めて幾度も談判をいたしましたが、オランダ人の勢はなか〳〵に強く、どうとも仕様がありません。仕方なく一度日本にまで歸つて、幕府にもその事を屆け、主人の末次平藏に相談して、改めてその復讐に出かけました。この時、親類や友達の者は、

『彌兵衛さん、復讐をするといつたつて、向ふは城まで作つて丈夫に構えてゐるといふ事ぢやないか、それにお前さんは武士ではなし、戰の仕方も知らないぢやないか。』

と、止めましたが、彌兵衛は、

『何に、俺も男だ。うまく行くか、行かないよりも、このまゝをめ〳〵としてゐては、第一日本の顏にかゝはるぢやないか、やれる所まではやるのさ。止めないでくれ。』

と、弟の小左衛門や自分の息子などと一緒に船に乘りこんで、寛永五年の三月三日に長崎の港を出て行きました。

さて安平港まで行きますと、オランダ人は早速彌兵衛等を捕へて城の中へ連れて行きました。彌兵衛等は捕へられるために來たのではありませんが、どうせ命を捨ててここまで來たのですから、少しのわるびれる樣子もなく連れられて行きました。城の中にはオランダの大守ヌイッといふ者がをります。彌兵衛等十餘人の者は、このヌイッに逢つて、

『何のため私達を捕へたのでございますか、もし不都合な者でございましたら、早速本國へ歸らせたらいいではございませんか。』

と、いひましたが、ヌイッはたゞ

『歸すことは出來ない。』

と、相手にならうともいたしません。この時彌兵衛は不意にヌイッに組付いて、その胸に刀をつきつけて、

『さあ、これでも歸さないといふか。』

と、吃驚する程の大聲で怒鳴りつけました。ヌイッの側にゐたオランダの者たちはびつくりて逃げ出してしひました。同時に城の中の兵隊たちは、

『それ騷動だ。』

と、窓の外から、鐵砲で彌兵衛等を打ち殺さうといたしました。しかし彌兵衛は落ちついたものです。

『なに？打つて見ろ、俺がその丸にあたつて死ぬよりも先に、お前たちの大將の胸に刀を突き通してしまふぞ。』

と、いひますので、ヌイッもぢつとしてはゐられません。

『おい鐵砲を打つことは止めろ、俺の命の方が助からない。』

と、兵隊を制しながら、改めて彌兵衛に、

『許してくれ、取つた品物はみんなかへすから。』

と賴みました。彌兵衛は、

『命が惜しくてあやまる樣な者のいふ事は信ずることは出來ない。取つた品物をすつかりかへすまでは、お前を自由にさしておかないぞ。』

と、ヌイッをぐる〳〵まきに縛つてしまひました。ヌイッは、

『嘘言はいはない。私の子と家來四人を人質として出すから。』

と、約束いたしました。

彌兵衛は、返した品物をすつかり船に積みこみ、ヌイッの子と、四人の家來も船に積みこんで、やつとヌイッの繩を解いて、そのまゝ目出度長崎に歸つてきました。

原田孫七郎　この人は肥前の人で、やはり海外貿易をしてゐた人であります。天正の時分にルソンに渡つて、南洋の事情に通じ、秀吉に

『南洋は、別段戰の用意がありません。征伐して日本の領地にしては如何でございま

す。』

と、すゝめました。秀吉も愉快な人ですから早速孫七郎を使として、

『毎年日本へ貢物を持つて來い、持つてこなければ征伐するぞ。』

と、元氣のよい手紙をやりました。この時分のフイリッピン群島はイスパニヤのものでありましたから、マニラにをりましたイスパニヤの大守は、この手紙を見てびつくりしましたが、使がたゞの商人でありますから、それをよい事にして、あたりさはりのない返事をして、ぐず〳〵してゐる中に、秀吉が朝鮮征伐をはじめましたので、南洋はそのまゝ日本のものとならないですみました。

魚屋助左衛門　この人は和泉の堺の商人でありまして、やはり南洋貿易をしてゐた人であります。それがため世間の人たちは、呂宋助左衛門といつてをりました。大層お金を儲けて、ルソンにも廣い土地を求めて、痛快な仕事をした人であります。

三　切支丹

海外との交通が盛になると一緒に、外國から珍しい品物も來れば、人間も渡つてきました。そして切支丹といふ宗教も渡つてきました。

それは德川時代よりも、もつと前の事でありますが、

天文の時分に鹿兒島に了西といふ人がありました。或日友達と喧嘩をして、相手を殺しました。了西は大變惡い事をしたと後悔いたしましたが、いくら後悔いたしましても相手が蘇生へるわけではなく、どうしたらよいかと、その時分鹿兒島へ來てをりましたポルトガル人に相談をいたしました。するとポルトガル人は、

『あなた、それは印度へいらつしやい。印度にはフランソハ・ザビエーといふ神樣の樣に偉い方がいらつしやいます。その人にお逢ひしなさい。』

と教へてくれました。そこで了西はポルトガルの船に乘つて印度へ出かました。このフランソア・ザビエーといふのは耶蘇教の宣教師でありましたので、了西はザビエー

についてその信者となりました。

やがてザビエーはこの了西を道案内として鹿兒島へきました、ザビエーは藩主島津貴久に逢つて、鹿兒島で耶蘇教を弘めることを賴みました。貴久も貿易の利益なことを知つてゐますから、この貿易を盛にする一つの手段としてこれを許しました。これが天文十八年の事でありまして、その翌年には百人程の信者が薩摩に出來ました。これが日本に耶蘇教の渡つた初めであります。その時分この耶蘇教のことを切支丹といつたのであります。

その後ポルトガルの船が肥前の平戸の領主松浦隆信に鐵砲を賣つたといふので、島津は耶蘇教を弘めることを禁じました。それがため、耶蘇教の宣教師たちは、大方平戸の方へ移つてしまひました。

その後ザビエーは印度へ歸りましたが、その後から又ちがつた宣教師がきまして、盛に布教いたしましたので、豐後、肥前、などには大分信者が出來ました。

話がわき道になりますが、長崎の港が盛になつてきたのもこの頃からでありまして、

初め肥前の平戸が盛んな貿易場で世間からは『西の都』とまでいはれてをりましたが、ここの領主松浦氏は領内の人民に耶蘇教を信ずることを許しましたが、自分は信者になりませんでした。ところが、同じ肥前の大村といふ大名は、佐世保灣の入口の横瀬といふ港をひらいて貿易したばかりでなく、自分もその信者になりました。宣教師たちは大層よろこんで横瀬の方へきましたが、この港は船を入れるのに不便でありますので、貿易船はやつぱり平戸の方へ行きます。そこで大村氏は福田といふ所へ港を作りましたが、ここも波が荒いので船が集まつてきません。そこで方々をさがした末、この福田から一里程東の深江といふ所によい港の地をさがしました。この深江は三方山にかこまれ、波も靜かで、船を入れるのには大變よい所でした。そこで、ここを貿易港として、長崎といふ名にかへました。それから、船もここへ集れば、宣教師たちもここへ集つて、貿易の盛になるのと一緒に、耶蘇教もここを中心として四方に弘がつて行きました。

やがて宣教師たちは京都にまではいつてきました。その時は丁度織田信長の時分で

ありまして、信長はそれ程耶蘇教を信じたわけではありませんでしたが、比叡山や、本願寺の坊さんたちがあまり信長のいふ事をききませんでしたから、信長は耶蘇教を信ずる事を許しました。それがため、京都には南蠻寺といふ大きな耶蘇教の教會がたち、安土にも教會や學校が建つて、耶蘇教はだん〳〵と盛になつて行きました。

その時分大友、大村、有馬などの九州の大名が耶蘇教を信じたばかりでなく、小西行長、石田三成、黒田孝高、細川忠興などもみんな信者でありました。

天正十年には大友宗鱗が大村、有馬兩家と相談して、イタリヤの羅馬法王の所へ使を出しました。使は伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノなどいふ十三歳から十五歳までの少年ばかりでありました。これらの少年は美しい着物を着てそれ〴〵の供をつれて、一月二十八日に長崎を出て、印度洋を渡り、アフリカの南をまはつて翌年の七月にポルトガルの都のリスボンに入りました。リスボンでは盛に歡迎されて、ここで國王にお目にかゝり、十三年の三月にはじめて羅馬につきました。ここで法王にお目にかゝり日本に歸つたのは十八年の七月でありました。

も一つ日本からローマ法王の所へ使がいつたことがあります。それはずつと後の事でありますが奥州の伊達正宗が、慶長十八年の九月にその臣の支倉常長といふものを使はしたのであります。

常長はまづ仙臺を出て太平洋を横斷してメキシコに渡りました。そしてからイスパニヤに渡りました。この時は元和元年になつてをりました。そして伊太利のローマにつきましたのがその年の九月でございました。常長は法王にお目にかゝつて、日本へ宣教師を送つてくれといふ事と、イスパニヤと貿易をしたいといふ事をたのみました。けれどもこの時分は日本で耶蘇教を禁じてゐた頃でありましたから、宣教師も來す、貿易の方もイスパニヤが日本と直接に貿易を行つては、ルソンと日本との貿易が衰へるかも知れないと思つて承知しませんでした。それで常長の使の役は二つともだめになつてしまひました。常長が再び太平洋を渡つて日本に歸りましたのは元和六年の八月でありました。しかし日本人が小さい船で太平洋を横斷したといふことは確かに勇ましい事でありました。

話は前にもどりまして、信長の死んだ後豐臣秀吉は耶蘇敎をどんな風にしたかと申しますと、

『これは油斷のならぬ宗敎だ。』

と思ひました。そのわけは、西洋の國はこのキリスト敎を弘めると一緒にその弘めた國をとつてしまふのであると、考へたのであります。それで天正十三年には京都の南蠻寺を壞してしまひました。南蠻寺はこわされましたが、宣敎師たちは長崎を中心として、方々へ入りこみ、盛に布敎いたしましたので、その勢力はなか〳〵衰へませんでした。

ところが慶長元年の事でした。四國の土佐の國へイスパニヤの船が流れついた事がありました。その時その船をしらべますと、世界地圖がありました。その地圖にはイスパニヤの領地がすつかりと書いてあります。そして船長の話によりますと、

『イスパニヤがこんなに領地を廣くしたのは、外國に宣敎師を送つて、その土地々々に耶蘇敎の信者を作り、土民をなつけてはその土地を自分のものにしたのである。』

といふのでありました。それを聞いた秀吉は、

『俺の考へてゐた通りだ。いよ〳〵大變である。』

と、すつかり耶蘇敎を禁じ、その信者を處分することにきめました。

家康はどうしたかと云ひますと、家康は外國と貿易するのは國の利益であるからこれを許しましたが、耶蘇敎は秀吉のした通り厳しく止めました。けれども貿易をいたしますと、自然宣敎師たちも出てまゐりまして、その信者はやつぱり增すばかりの有樣でありました。

秀忠も亦厳しく耶蘇敎を禁じて、日本中の寺々にいひつけて、その寺の檀家を書き出させ、もし寺の檀家でないものがあつたらよくそれを調べ、もしそれが耶蘇敎の信者であれば、すつかり死刑にいたしました。

そこへ持つて來て、元和三年に大變なことが見つかりました。それはオランダの船が或日ポルトガルの船を一隻長崎へ連れてきました。その船の中に、ポルトガルの本國から日本にゐる宣敎師にあてた手紙がありました、その手紙には

『日本に耶蘇教の信者が日本人の半分以上になつたら早速通知せよ。早速多くの軍艦を送るから。』

と書いてありました。そこで秀忠は一層耶蘇教を禁じました。

三代將軍家光の時になりましては、秀忠同様信者をみつかり次第に死刑にいたしました。又その信者を見付け出す方法としまして、キリストの母マリヤの像を紙にかいたり、木に彫りつけたり、銅版にあらはしたりして、みんなの人に踏ませました。これはもし信者でなければ、それを平氣で踏みますが、信者の者はこれを踏まなかつたので、容易く信者を見つけ出されたといふ事であります。しかし、それがために九州に大騒動が起りました。

四　島原の亂

耶蘇教が九州の邊に弘まつてきた時の事でありました。一人の宣教師が末鑑といふものを書きました。その中に

繪踏み

『今から二十年程後には暴主は死んでしまひ、一人の神童がこの日本に生れる。それは日本を救つてくれる主である。その年には時ならぬ時に、木には花がさき、天は眞紅に染まるであらう。』

と書いてありました。ところが丁度その二十年目頃の事でありました。九州の天草島に不思議な一人の少年が現はれました。父は小西行長の遺臣で益田好次といふものでした。少年の名は益田四郎、年は十六歳でありましたが、見るから立派な美少年で讀み書きも上手であれば、知惠もすぐれ、その上人の出來ない事をいたします。

或時は鳩を掌に止らせて卵を産せます。又或時は雀の止まつてゐる竹の枝を折つても雀が逃げようともせずに鳴いてゐる樣な事をいたします。

ところが、寛永の十四年の事でした九州に大旱魃がつゞきました。そのためでありましたか、數日の間も、太陽が西に傾く頃になりますと空は一面に紅を流した樣に、ものすごくも紅にそまります。

そればかりではありません。その秋にはいろいろの木に、時ならぬ花がさきました。人々は

『これはたゞ事ではない。何かの變のくる兆である。』

と話し合ひました。その上わるい事がよくも同時に起りましたもので、將軍家光が病氣になりました。その噂が九州まで來るまに『將軍は死なれたさうだ。』とかはつてしまひました。

さあ、面白いと申しませうか、困つた事だと申しませうか、四郎といふ神童、紅い空、時ならぬ花、將軍の死これだけの事が揃ひますと、二十年昔の豫言がどうやら的中してゐるといふ事になります。天草あたりは、わけて耶蘇教の信者が多い所でございます。その信者たちは

『いよ〳〵救ひ主があらはれたのである。』

『エス様の再來である。確かにそれにちがひない。私達は今この方の御手にすがつてお助けを求めねば、救はれる時はないのだ。』

と、騒ぎはじめました。

しかも平素であれば、たとへこの豫言が的中しても大きな騒ぎにはならなかつたでせうが、この天草地方の領主であり、人々に耶蘇教の信者になれとすゝめてくれた有馬氏は、幕府から他に移されてしまひ、今この地方を治めてゐるのは切支丹ぎらひの松倉重政といふ人でございます。この重政は耶蘇教の信者と見れば、生きながら海に沈めたり、焼き殺したり、時には信者を温泉ケ嶽の憤火口へ投げこんだり、もつと慘酷な時には、竹鋸で信者の首を引きさる様な、全く話をきいただけでも慄へる程のむごたらしい事をいたしました。こんな事をされますと、如何に心のよい信者たちでも、ぢつとして殺される日の來るのを待つてはゐられません。

『生きたいためには、この殿様に叛くより外はないのだ。皆様覺悟をいたしませう。』

と、一人がいひますと、

『神様にお祈りするのもたゞ幸福な一生を送りたいためです。その幸福を奪ばはうとする者に從ふ事は出來ません。』

と又一人がいひます。その氣持が次から次へと信者の間に廣まつて行きました。

その時分やはり行長の家來であつた、大矢野松右衛門といふ信者がありました。關ケ原の戰以來の德川に對する恨もあつたのでせうし、幕府が耶蘇敎の信者に與へる仕打にも腹も立つたのでせう。益田四郎の名によつて、

『今その時が來たのです。一命を捧げて切支丹宗のために盡しませう。そして再び昔の自由な世に歸りませう。』

といふ意味の密書をかいて島原半島から天草島の信者たちにくばりました。

信者たちは四郎をキリストの再來と信じてゐる時でございます。昔の豫言の的中した時と信じてゐる時でございます。幕府の仕打に腹を立ててゐる時でございます。領主松倉の慘酷に泣いてゐる時でございます。みんなよろこんでこのすゝめに應じました。そして寛永十四年十一月二十三日に一同は島原の原の城に據りました。男女合せて三萬七千人、原の城はもと有馬氏の城でありまして、海の中に突き出た絶壁の上に立つて、誠に要害な城でありました。

天草四郎

この騒動の知らせが第一番に大阪にとどきました。大阪にゐた幕府の役人は急いで、九州の鍋島、細川等の大名に命令して、征伐に向ふ様にしました。

その使が江戸へつきました時、幕府は板倉重昌を大將として、九州に向はせました。しかし江戸から大兵を連れて行つたわけではありません。九州へ行つて九州の大名を集めてその總大將とさしたわけであります。ところがこの板倉重昌は三河の小さい大名で、たとへ九州へ行つても鍋島、細川などといふ大大名に命令を下す程の人望のある人ではありませんでした。それといふのも幕府もこの騒動を、百姓一揆位にしか考へてゐなかつたのであります。

ですから重昌が出發いたしました日にも、それときました柳生但馬守はその事をききますと。

『この騒動は容易に平定しさうにもない。重昌では中々鎮定は困難にちがひない。どうしても一つ位の上の人をやらねばならない。早く行つて重昌にその目を遠慮させてやらう。』と只一人馬を走らせて、重昌の後を追ひましたが、品川まで行つても、川

崎まで行つてもたうとう追ひ付くことは出來ず、その中に日が暮れましたので仕方なく歸つてきました。

但馬守はその晩將軍家光のご前に出まして、よくその事を話して、

『お許がございますれば、も一度追掛けて、重昌を連れ歸らうと存じます。若し後になりまして、大將を換えます樣な事がございましては、重昌は自分の責任としてきつと討死いたしませうから。』

といひました。家光も成程自分の考は少し輕はづみであつたと、後悔いたしましたが、もう今更命令をし直す譯にもまゐりませんので、そのまゝにしておきました。

九州へついた重昌は松倉の兵隊に鍋島、細川などの兵二萬人を合せて十二月の八日から原の城を攻めかゝりましたが、信者たちは決死の覺悟といふよりも、神樣のために死ぬるのは名譽の事であり、有難い事であると考へてをるのでありますから、中々堅固に守つて弱る樣子もありません。そこで重昌も

『下手に攻めて兵士たちを殺すよりも、兵糧攻めにする方がよからう。』

と、それからは戰をするのは止めて、たゞ城の中の兵糧のなくなるのを待つてゐました。けれども城の中には、五千石の兵糧を積み込んでをりますので困る樣子もなく、毎日圍んでゐる兵士たちに、

『やーい。どうしたんだい、腰拔け侍。』

『松倉は稅金を取るのは强いが、戰には弱いんだな。』

『切支丹の信者になれ、も少し强くなるぞ。』

『一萬五千石の大將ぢやあ、この城は落ちないよ。』

などと惡口をいひます。これを聞いてゐる松倉勢をはじめ、寄手の者たちは、口惜しくてたまりません。が、さて大將の命令ですから、戰ふわけにもまゐりません。大將の板倉重昌も殘念ですが、ぢつと辛棒して城兵の弱るのを待つてをりました。

その中にも城の容易に落ちない事が、江戸へ毎日の樣に知らせてまゐります。江戸の方でも捨てて置けなくなりまして、たうとう老中松平信綱を大將として九州へやることにいたしました。信綱は智惠伊豆とまでいはれてゐる人で、この人ならば、九州

のどんな大名の上にたつても立派に命令が下だせて行ける人でありました。けれども
この信綱の九州へ行きますことは、先に行つてゐる板倉重昌にとつてはまことに氣の
毒なこととなります。この時も大久保彦左衛門は、
『やれやれ板倉が可愛想だ、これや討死しよるぞ。』
といつたといふ事であります。
二度目の大將松平信綱は十二月の三日に江戸を出まして、九州をさして進んで行き
ました。これを聞きました板倉重昌は、
『改めて老中が來るのは、私の戰の仕方が悪いといふ事にちがひない。私はなるだけ
兵隊を殺さない樣にわざと戰をしなかつたのであるが、もうこの上はぢつとしては
ゐられない。』
と、寛永十五年の正月の元日から總攻擊を始めましたが、敵は相變らず、頑固に戰ひ
ますので、彦左衛門たちが心配した通り氣の毒にも、此の目出度い日に重昌はたう
どう戰死してしまひました。この日寄手の兵は三千八百人も死傷しましたが、城兵の

死傷はたつた十七人しかなかつたといふ事であります。これを見ましても信者たちの
勢がどんなに強かつたかゞわかるのであります。
信綱は正月の四日に島原につきました。敵の樣子を見ますとやはり攻めることは出
來ないので、重昌のした通り兵糧攻めにするより外に仕方はありませんでした。
重昌の敗けたことが幕府にきこえますと、家光は江戸に來てゐる九州の大名たちに、
『すぐに歸つて島原を援けに行け。』
と命令を下しました。信綱は城中に向つて降參をせよ。とすゝめましたが、城中の者はききません。
仕方なく、地中に坑道を作つて城中に兵を入れようとしましたが、城中からも坑道を
作つて、その穴から煙を送つて、兵を城の中に入れさせません。けれどもその中に城
の兵糧はだん〳〵と少なくなつてきました。それを知つた信綱は二月の二十六日から
總攻擊をはじめて、二十八日にたうとう城を陷れることが出來ました。
この時城中に生きてゐた者たちは、益田四郎をはじめみんなハリツケにされてしま

ひました。その有様がまことに慘酷であつたため、其時まで内密で日本に入りこんでゐた宣教師たちもみんな恐れて國にかへつてしまひました。

五　門を閉めて

秀吉このかた、日本では切支丹宗を禁じてきましたが、信者はだん〴〵に増すばかりで、わけて九州ではたくさんの信者がをりました。徳川家光になりまして、どうかしてこれを禁じたいといろ〳〵手をつくしましたが、手をつくせばつくす程、事が面倒になつて、たうとう島原の亂といふ大騒動になつてしまひました。幕府は切支丹宗がもう恐ろしくなつてきました。

『こんな恐ろしい宗教が國内にはいつてきたのも外國と交通するからだ。貿易は大そう利益な事であるが、その利益よりも、それにつれてこんな恐ろしい戰が起つては何の役にも立たない。立たないばかりか、うつかりしてゐては國まで取られてしまふにちがひない。』

と、考へました。この考はあまりに臆病でありましたが、家光は、

寛永の十三年に、日本の者は海を渡つて他所の國へ行つてはならない。

といふ規則を作りました。これでも不安心と見えまして、

同じ十五年には五百石積以上の船を作つてはならない。

といふ規則を作りました。かう船を小さくしておきますと、自然外國へ行かれないからであります。

その十六年には鎖國令を出しまして、

オランダ人より外の西洋人は日本に來てはいけない。

としたのであります。なぜオランダ人だけを許しましたかといへば、オランダ人だけは切支丹宗を日本にすゝめなかつたばかりでなくポルトガルの者が日本に切支丹宗を弘めて日本の國をとつてしまはう、とする謀みなどを日本に知らしてくれたのでありますから、この國だけは、支那と同様日本にきてもよいといふ事にしたのであります。けれどもこのオランダ人も支那人もたゞ貿易を許しただけで、長崎より外の港へ行つ

てはいけない。その長崎さへも勝手に上陸してはならない。長崎の町へ上陸する時には、ちやんと日本の役人がついてまはる、といふ有樣でありました。

それにつれて日本の者は外國の本を見る事も出來ず、外國の樣子を知ることも出來ず、全く門を閉めて家の中ばかりに暮してゐるといふ有樣となりました。

それで家の外にはどんなよい事があつても、かはつた事があつても一向に知らず、小さい島の中で、『日本はよい國だ』『こんな結構な國は世界中にないのだ。』『一番賢い者の住んでゐる國だ。』と勝手な事を思つて長い年月の間を暮してをりました。

その間に世界にはいろ〳〵の進歩した機械が出來、深い學問が研究されてゐました。それを日本は少しもご存じでなく、やがて黑船が二三艘品川の沖に現はれますと、それに驚いて夜も寢られない程のさわぎをする樣になりました。

日本がこの樣に世界の進歩におくれたのもこの切支丹宗のお蔭といひませうか、この鎖國令のお蔭と申しませうか、とに角この邊に原因してゐるのであります。

1 三代將軍家光は生れながらの將軍であつた。
2 外樣の大名も譜代同樣に待遇した。
3 後奈良天皇の御代の頃から外國の船が盛に日本に來た。
4 外國人が來るのと一緒に日本にキリスト教が渡つてきた。
5 秀吉も家康も秀忠もキリスト教を禁じた。
6 家光の時になつてキリストの信者が島原で亂を起した。
7 幕府はキリスト教を禁ずるために。オランダ人より外の西洋人の日本に來ることを禁じ、日本人の海外に出ることも禁じた。

第三十九　後光明天皇

一　不都合な幕府

徳川家康もやつぱり信長や、秀吉と同じ様に朝廷を敬ひ、皇居を造り、御料を奉りましたが、實は自分が日本中の政治の權利を自分のものにしたいといふ心からでした。家康ばかりではありません。徳川幕府はいつも表で朝廷を尊び、かげで朝廷の權力を抑へよう抑へようといたしました。この幕府の仕方は幕府の勢をだん〴〵とよくして行きましたが、徳川幕府のくづれてしまつたのもこんな事をした結果でありました。

だからあまり勝手はしないものであります。その勝手の二三を擧げてみますと、

二代將軍秀忠はその女和子を後水尾天皇のお后といたしました。これは表面の幕府が朝廷と仲をよくするために、といふ事でありましたが、實は世の中に幕府の偉いことを知らさうとの考と、それをよい折にして、和子附の侍を數十人も御所の中に住はせまして、名はお后の御用を務めるのであるといひながら、もしや朝廷の方で幕府のためにならない事をしないかと、いつも見張をしてゐたのであります。

又京都に所司代といふ役人を置いて、自由に御所へはいつて、朝廷のいろ〳〵の事柄に構立をいたしました。

さてお后に上つた和子でございますが、幕府の方ではどうか和子が天皇のお子様をお生みしてくれればよいと祈つてをりましたら、その甲斐があつたとみえて、和子はまもなく興子内親王をお生みいたしました。徳川の方では大喜ひでございます。すると又二年の後皇子高仁親王をお産み申し上げました。さあ幕府はいよ〳〵藤原氏の昔を眞似することが出來るぞ、この皇子が天皇の御位におつきになれば、徳川氏は天皇

の外戚である。この上の勝手が出來るぞと考へてをりました。ですからそれまではなるたけ天皇様のご機嫌をとつておかなければならないと、皇子のお生れになつたその年の夏、秀忠と家光とは揃つて京都へ行きまして、二條の城にとまつて、そこへ天皇の行幸をおねがひいたしました。そこでその九月に天皇は中宮和子とご一緒に二條の城に行幸なさいました。秀忠親子は天皇様を五日の間もお止めをして出來るだけのおもてなしをいたしました。

ところがこの時將軍のお供をして京都へ行つた崇傳といふお坊さんがありました。この崇傳は幕府の顧問でなか〳〵勢がありました上、寺やお宮の取締をしてゐましたので、京都へ來るのと一緒に、京都のお寺や、お宮をしらべました。すると、京都の大きなお寺のお坊さんの中で天皇様から紫の法衣をいたゞいた人が大分ありました。崇傳はこの事を幕府へしらせますと、幕府ではかう考へました。

『寺の勢といふものは中々大きいものである。『もしも天皇様が幕府を憎まれて、戰を起される様な事のあつた時、これらの坊さんたちが天皇に味方する様な事があつては大變である、そんな法衣は取り上げてしまつた方がよい。』

と考へまして、その翌年の四年に、

『朝廷が將軍に相談もなく、直接坊さんに紫の法衣をおやりになることは止して下さい。今まで與へた法衣は幕府の方で取りかへてしまひます。』

と、申し上げました。朝廷の役人の方では、

『天皇様がなされた事に、よけいなさしで口をするのはよくない。とに角これから後の事は別として、今までの事はそのまゝにしたらよからう。』

と、いひましたが、京都の所司代に幕府の命令であるから、と無理にそのお坊さんたちの折角いたゞいた法衣を取り上げてしまひました。その時お坊さんの中で大德寺の澤庵和尚など二三人の人がその法衣をかへさなかつた者がありましたので、幕府はそのお坊さんたちを江戸へ連れて行つて、やがて奥羽の方へ流してしまひました。

この事をおききになつた天皇は、お腹立ちのあまり、御位を高仁親王にお讓りにならうといたされました。すると幕府は、

『それではまことに恐れ入ります。』

と、申し上げましたが、かげでは恐れ入るよりも喜び入つて、急に天皇様のお隱居遊ばされるご殿をこしらへはじめました。するとその年に高仁親王はお三歳でおかくれになりました。幕府の方では大切な寶物をなくした樣にがつかりいたしましたが、それでもご殿を作ることは止めにしませんでした。その出來上つたご殿が仙洞御所でございます。天皇はこれら幕府の不都合をご覽になりますと、尙更お怒りも强く、

芦原よ茂らば茂れおのがまゝ
とても道ある世とは思はず

と、やがてお位を興子内親王にお讓りになると、幕府の方へいつてやりました。それをきいた幕府では、今度は恐入る樣子もなく、左樣でございますかと失禮なお返辭を申し上げて、そのすぐあとから春日局を京に上らせて、天皇がほんとにその事をおつしやつたかどうかを伺はせました。この事はまことに不都合なことでありまして、今でも春日の局を賢い女の樣に申しますが、こんなお使をする所をみますと、賢い所かまことに不都合な女でございます。ところが如何に幕府のいひつけだとは云ひながら、この局は天皇樣の御前に出られる樣なそんな身分ではございません。そこで幕府は失禮にも、春日局をあるお公卿樣の妹分にして、從二位といふ位を無理にいたゞかせて、天皇のご前に伺はせました。かうなつては天皇も御辛棒がお出來になれず、その年の十一月に突然、お位をお退きになつて、位を御年六歳の興子内親王にお讓りになりました。稱德天皇このかた大方九百年、たえてなかつた女帝が皇位にお上りになつたわけであります。これを明正天皇と申し上げます。

明正天皇はお位にあること十五年で御位を御母樣ちがひの御弟後光明天皇にお讓りになりました。

二　ここで腹をきされ

後光明天皇は、御年十一歳で御位におつきになりましたが、深く學問を修められ、和歌もお上手でいらつしやいました。この天皇の御話といたしましては、御性質がま

ことに雷がおきらひでございました。けれども天皇はどうかして、その御性質をお直しにならうとお考へになり、

『これは、自身で直すより外に道はない。』

と、或時の大雷雨にわざと縁近い所に御坐を設けられて、その恐しさをご辛棒なされて、その後はどんな雷にもお恐れならなくなつたといふ事であります。

この樣に英明な天皇であられましたので、幕府に對されても、少しもその我儘をお許しになりませんでした。

或時御父、後水尾上皇がご病氣におかゝりになりました。天皇は上皇のおいでになる仙洞御所へそのお見舞にいらつしやらうとなさいました。すると所司代の板倉重宗が、不都合にも、

『陛下が御所より外においでになることは、一應幕府とご相談あつて後、お願ひいたしたいと存じます。』

と申し上げました。すると天皇は、

後光明天皇

『子として父上の御病氣をお見舞するのに何の不都合があるのか、もし私が御所より外に出るのがいけないとするならば、御所から仙洞までの長廊下を作れよ、私はその廊下つたひにお見舞するであらうぞ。』

と申されました。それにはさすがの重宗も恐れ入りました。その恐れ入つてゐる中に天皇は仙洞御所をさしてお出かけになりました。

天皇は學問をご勉强なさつたばかりでなく武藝の方にまで御精勵なさいました。ところが幕府にとりましては、さう天皇樣がお偉くなられては心配でたまりません。早速所司代の重宗が御所へ馳けつけまして、

『陛下、陛下が武藝をお修めになることは公家法度でお止め申してあるのでございます。どうぞお止め下さい。』

と申し上げました。すると天皇は、

『さうか、全體その公家法度といふものは誰が作つたものか。』

重宗は、

『はい。それは元和元年七月十七日、二條城に置きまして家康公が關白以下の公卿樣方にお示しになつた規則でございます。』

『すると家康は朝廷の事まで自分勝手に取りきめてよいのか。』

これには重宗もぐつとお返事につまつてしまひました。たとへ將軍でありませうとも、一天萬乘の君の自由を縛るといふ事は勿論惡い事であります。ましてこの公家法度を家康がこしらへたわけは、なるたけ朝廷に仕事の出來ない樣、勢の弱くなる樣にこしらへたものでありますから、重宗のご返答にこまるのはあたりまへの事であります。けれども、京都にゐて朝廷を抑へることを仕事にしてゐる所司代のことでありますから、おどしつけてきかれない時には泣きつくのがよいと考へました。

『しかしながら陛下、今更私に公家法度のよしあしを申されましても私にそれをどうする力もございません。私はたゞ幕府の命令のまゝに陛下に申し上げるのでございます。もしも陛下がこの上武藝をお修めになりましては、私は私の責任といたしまして、切腹をいたさねばなりません。』

と、私がお願ひですから。とでもいふ樣子をしてどうしても天皇の武藝の御練習を止めようとしました。でも天皇は重宗の樣なものに敗けておいでにはなりません。

『それは何よりだ、私はまだ武士の切腹の樣を見たことがない。お前はこれから紫宸殿の庭に席を設けてそこで腹を切れ、見物してやるから。』

と申されましたので、始めから腹などを切る量見などは少しもない重宗は、すつかり恐れ入つてしまひました。

天皇がこの樣にすぐれておいでになるので幕府の方でもどうすればよいのかと困つてゐましたが、惜しい事には、御年二十二歳でおかくれになりました。きつと幕府ではやれ〳〵と安心したことでありませう。

1 家康は朝廷を尊んだが、政治の權利を自分のものにしたいために、京都に所司代を置いて朝廷を抑へた。

2 秀忠はその女和子を後水尾天皇の后として幕府の威權を加へた。

3 徳川氏がだんだん專横なことをするので後水尾天皇はお怒りになつて位を和子の生み奉つた明正天皇にゆづられた。

4 後光明天皇は英明な方であつて、いつも幕府の勝手をお抑へになつた。

第四十　徳川光圀

一　學びの園

戰國時代からこのかた、日本中はここにもあそこにも戰ばかり、劔の光に槍の影に血なまぐさい風が何百年といふ間國中を吹きまはしてをりました。

徳川家康は天下を自分の物とする樣になつてから、學問を盛にして戰を止めさせようと考へました。これはまことによい考でありました。戰國時代をはじめその前頃から、武士といひ、大將といつても、實は少しの學問も知らない者が澤山ありました。

ですからたゞ強ばかりで物の道理にくらく、正邪の考もわきまへなかつたため、時々條理にちがつた事をしたのでありました。家康が學問をすゝめる樣になりましてから次次にと名高い學者があらはれ、その學者の多くなるにつれて、世間一般にも學問が盛になつてきました。

秀吉の時分に藤原惺窩といふ人が京都に出ました。この人は百人一首を選んだ藤原定家といふ人の子孫でありまして、支那の學問にあかるい人でありました。家康は秀吉のゐる時分からこの惺窩についてそのお話をききました。惺窩の死んだ後、その弟子林道春といふ人が幕府につかへました。

林道春はやはり京都の人で小さい時建仁寺といふ寺に行つて學問を習ひましたが、物覺えがよく、讀んだだけの本はすつかり覺えてしまふので、みんなこれは末頼もしい子だと驚いてゐました。道春はたゞ覺えるばかりでありません、それについて自分の考も新しく作りました。ですからまだ年の若い時分から支那の朱子といふ人の學問について自分の考を立てて、これを弟子たちに敎へました。するとある古い學者が、

そんな新しい事をいふと罪におとしてしまへ、などといひましたが、道春はやはり自分の考通りを敎へてゐました。

ところが藤原惺窩といふ人も朱子といふ人の學問をよくしらべ、それについて自分の考もちやんときめてゐましたが、まだ表面にそれを發表してをりませんでした。ある時道春がこの惺窩に逢ひました時、惺窩の話をききますと、自分よりもつと優れた所がありますので、道春は早速その弟子になつたのであります。道春が家康の所へ來ましたのは慶長十一年の事でありました。

家光の時になりまして、江戸の忍ケ岡を道春に與へました。道春はそこに學校を建てました。また支那の孔子の廟もそこに建てました。道春はここに住居して弟子たちに敎へてゐましたが、幕府は道春にいひつけて、日本中の武家の系圖をしらべさせました。それが三年程に出來上りましたので、こんどは日本の歷史をしらべさせました。ところがこの本のまだ出來上らない先に道春は死にましたので、その子の春勝がやはり幕府の命令でつゞいてそれを調べてゐました。それが寛文十年になつて出來上りま

した。この本を本朝通鑑といひます。大昔から慶長十六年までの日本の事情を書いたものであります。

五代將軍綱吉は學問がすきでしたので、道春の孫の信篤を呼んで學問を習ひました。將軍がこの通りの熱心でありますから、どの大名もみんなその家來たちに學問をすゝめました。この樣に學問が盛になつて來ますと、忍ヶ岡の學校が狹くなつてきました。そこで元祿三年に綱吉は學校や孔子の廟を、今日のお茶の水に移しまして立派なものとしました。今の教育博物館になつてゐる所がそれであります。

二　いろ〳〵の學者

幕府では林氏が大學頭といふ位で學問を教へてをります。この江戸を中心として學問は日本中にひろまつて行きました。

その頃近江に中江藤樹といふ學者がありました。この人は支那の王陽明といふ人の學問を信じて、知行合一といふ事を一番大切に教へました。これは知ることと、行ふ

こととはいつも一致してゐなければならない。知つても行ふ事の出來ない樣では學問をした甲斐がない。と教へたのであります。ですから、田舍にゐたにもかゝはらず、日本中から弟子が集つてきました。侍ばかりでなく、百姓も商人もその教を受けて、藤樹のゐた村をはじめ此の近所には一人の悪い事をするものもなくなりました。そこで世の中の人は藤樹の事を近江聖人といひました。

備前の藩主池田光政はその名をきいて、どうかして藤樹を招きたいと思ひましたが、藤樹は、

『まだお母樣がいらつしやるから、他所へ行つては孝行が出來ませんから。』

といつて貧乏をしながらも、母に孝行をしてをりました。けれども光政から度々たのまれますので、その弟子の熊澤蕃山を光政に仕へさせました。

蕃山は學問が深いばかりでなく、その學問をよく實際に行ひました。その仕事には、孝子、貞婦を賞め、田畑の水利をひらき、荒地を開き、學校を建てるなど、他所の藩でしない事をいたしましたので、池田の藩は大變よくなりました。

藤樹と同じ頃に、土佐の國に谷時中といふ學者がありました。その弟子に野中兼山といふ人があります、藩主山内氏に仕へて多くの仕事をいたしました。

又京都に伊藤仁齋といふ學者がありました。この人ははじめ林氏と同じ樣に朱子の學問をしてゐましたが、後になつて、自分で一つの學問を開いて多くの弟子を敎へてゐました。その子の東涯といふ人もまた名高い學者でありました。

その時江戸には荻生徂徠といふ人がゐました。この人もはじめは朱子學を修めましたが、あとになつて、朱子の學問のいけないことを擧げ、又伊藤仁齋の學問まで攻擊いたしました。

山鹿素行といふ學者がありました。この人は兵法の學者でありますが、小さい時は神道・春について朱子の學問を習ひました。ところがこの人も年四十位になつて、朱子の學問に誤のあることを知りまして、その誤であることを世の中に發表しました。ところが、將軍家光の弟で、會津の藩主保科正之が山崎闇齋を先生として朱子の學問をしてをりましたので、素行が、朱子學の惡口をいひますのが癪にさはりましたので、

幕府に申し出て、素行を捕へて赤穗の藩にあづけてしまひました。素行はその前にも赤穗の藩で學問を敎へてゐましたが、その間赤穗の侍ちは、素行について、兵法を習ひ、學問を習ひました。あとで四十七士の頭領になつた大石義雄なども素行について學んだのであります。

この山崎闇齋といふ人は小さい時はお坊さんでありましたが、大きくなつた後、土佐へ行つて野中兼山について學問をしたのであります。闇齋はまた神道も修めました。佛道、儒道、神道、なんでもござれの人でありました。この人の弟子に淺見絅齋といふ人がありました。この人は近江の人でやがて尊王論のさきがけをしたのであります。

木下順庵も京都から出た大學者であります。はじめ加賀の前田侯に仕へてゐましたが、後幕府に仕へて儒官となりました。その弟子に新井白石、室鳩巣などの有名な人があります。

三　櫻の馬場

水戸の藩主德川光圀は賴房の子で、家康の孫にあたります。小さい時の名を千代松麿といひましたが、九歲の時元服をしまして、將軍家光の一字をもらつて、光圀とつけました。

小さい時から才智もあり、勇氣もあつていつもおそばの人々を驚かしたといふ事であります。

或時屋敷から四五丁もはなれてゐる櫻の馬場といふ所で、罪人の首を斬りました。昔は重い罪人の首はその罪科をかいて晒首にいたしましたので、この日もその罪人の首を、そこに晒しておきました。話をきいても心地のよくない事でありますから、はんとに見たならばきつといやな氣持になるにちがひありません。ですからそんな首を晒してある場所なんかは、夜分通行する人はなかつたにちがひありません。ところがその晩賴房は、七歲になつたばかりの光圀に、

『これから櫻の馬場へ行つて、罪人の首を取つて來い。』

と、いひつけました。賴房はもとよりそんな首に用のあつたわけではありまん。ただ

光圀の膽玉を試して見ようとしたのであります。ところが光圀は少しもこはさうな樣子もなく、『ハイ』とそのまゝ父の前から立つて行きました。その馬場へは二三十分もかゝれば歸つて來る筈でありますが、いつになつても光圀はかへつてきません。さすがに賴房も心配になつてきました。どうしたのかと、思つてゐる所へ光圀は歸つて來ました。

『どうしてゐたのか。』

と、ききますと、

『暗くて道がなか〳〵わかりませんでした。それに首が重くて持たれないのですもの、引きずりながら二三べんも休みましたからこんなにおそくなつたのございます。』

と、平氣で答へました。賴房は、あゝ天晴我が子だ、水戸家のあとはこの子に取らさうとした私の考は間違ではなかつた。とよろこびながら、褒美の刀を光圀に與へたといふ事であります。

光圀は大きくなるにつれて、學問をはげみました。その學問をつゞけるにつれて、

世の中の事がよくわかつてまゐります。光圀が十八歳の時でありました。ある時支那の史記といふ本を讀みました。その一番はじめに伯夷傳といふのがあります。この本の中に、

伯夷叔齊は孤竹の君の子である。その父が弟の叔齊を愛して自分の繼嗣にしようと思つてゐたが、そのまゝ死んでしまつた。叔齊は父の死んだ後、家督を兄の伯夷にすゝめた。けれども伯夷は父の命令であるから、あなたが家のあとを立てなさい。とそのまゝ國を出て行つてしまつた。すると叔齊も亦兄のあとを追ふて國を出て行つてしまつた。國の人々はそこで相談をして、仲子を立ててその國の君とした。

と、書いてあるのを見て、光圀の顔には、にはかに當惑の樣子がみえました。

それは光圀には一人の兄があるのでありますが、その兄は水戸家をつがず、讃岐の高松の城主となつてゐるのであります。ですから光圀は『自分は兄を越えて家を繼いだのである。叔齊に比べてまことに恥かしい事である。』と思つたのであります。孔子が史記といふ本を作つて一番さきにこの伯夷といふ人の事をかいたのも、國の亂れ一

家の不和は兄弟の爭がもとである。兄弟が互に讓り合ふ時それが、一家の和合となり、國家太平の基であることを考へたからでありました。光圀は水戸の世嗣となつた時は、僅かに六歳の時でありましたから、兄樣を置いて弟が世嗣になることがよいか惡いかまだ知らなかつたのであります。今それがわかつてみますと、心苦しくてたまりません。寛文元年に父の賴房のなくなつた時、兄樣の子を自分の養子として水戸家を讓ることを約束いたしました。そして元祿三年六十三歳で隱居しました時、兄樣賴重の子綱條にその家を讓りました。そして自分の子の賴常には高松の城主として松平家のあとを立てさせたのであります。

四　歷史の本

光圀は學問を勵むにつれて、『本がなかつたならば昔のよい文も見ることは出來ない。歷史を讀まなければ昔の事を知ることは出來ない。』と思ひまして、どうかして立派な日本の歷史を作つてみたいと考へました。そこで明曆三年に、今の東京の第一高

等學校のある所に歴史の研究所を作つて、昔から傳はつて來た多くの本を集め、又多くの學者を集めてともどもにその研究をはじました。父頼房のなくなつた後は、その研究所を今の砲兵工廠のある水戸の上屋敷に移しまして、その研究所を彰考館と名づけ、ます〳〵その研究をつゞけました。

この本を後で『大日本史』と名づけました。大日本史は光圀一代で出來たものではありません。光圀の七十歳になつた時、神武天皇から後小松天皇の御代まで、七十三卷の原稿が出來ました。それから一年の後には皇族方の傳記の三十二卷が出來上りました。ところが光圀は七十三歳でなくなりました。この時臣下の傳記の一部も少しは出來上つてをりました。光圀はなくなりましたが、光圀はじめからこの仕事を自分一代で出來るとは思つてをりませんでした。それから水戸家では代々この仕事をつゞけて、享保五年光圀が死んでから二十年目に總計二百五十卷を本にして幕府に奉りました。それから光格天皇の時に朝廷に奉りました。この間にも水戸家ではます〳〵その研究をつゞけて、大日本史全部四百三卷の出來上つたのは明治三十九年で、光圀が

水戸黄門

この仕事をはじめてから二百五十年かゝつたのであります。どんな仕事によらず、これだけの努力をつゞけますれば、立派なものとすることが出來るのであります。

とりわけ大日本史の、今まであつた日本の歴史にくらべて立派な所は、神功皇后を天皇でなく皇妃であるとし、弘文天皇の大友皇子を天皇として御歴代の中に加へ、南朝を正統の天皇であるとした所にあります。今日の歴史はみなこの大日本史によつて作られたものであります。

五　嗚呼忠臣

光圀は大日本史を著して日本の國體を明かにし、天皇と人氏との別を正し、皇室を尊ぶべきことを人々に知らせました。人に知らせたばかりではありません。毎年元日には早朝に禮服をつけて、遙かに西の方京都の方に向つて天皇を拜しました。

またいつも家來たちに、

『日本のご主人は天皇陛下であつて、徳川の將軍は私の家の親類にすぎない。お前た

ちもその事はよく承知してゐて、萬一の場合に心得ちがひのない様にせよ。』

といつてゐました。

徳川幕府の時分には、南朝と北朝とどちらが正しいのかわからない位でありますから、楠木正成が忠臣なのか、足利尊氏が忠臣なのか知らなかつたのであります、そればかりでなく、幕府の方では、尊氏は將軍であつたのでありますから、その將軍を討つた楠木正成の方がよつぽど悪い者に思つてゐたのであります。それで光圀は人を神戸にある楠寺にやつて、正成の位牌や、書物などをしらべさせて正成のお墓の場所をしらべ、そこに立派な石碑をたてました。墓の臺石は昔正成の領してゐた攝津、河内、和泉の石をあつめて築き上げ、石碑には『嗚呼忠臣楠子之墓』といふ字を書いて正成は日本の大忠臣であることを世に示しました。碑の文字は光圀自身がかきました。碑の裏には、明の忠臣朱舜水の作つた文を刻りつけました。今日湊川神社の境内にあります正成の墓はこの時光圀の作つたものであります。

楠木正成を忠臣として世に知らしたばかりではありません。自分の領内の孝行な子

供、感心な妻、忠義な僕などは一々さがし出して褒美を與へ、忠孝の道を世にすゝましたことは一通りではありませんでした。

六　水戸黄門

光圀は六十三歳で家を養子綱條に讓り、自分は水戸の西山といふ所に隱居いたしました。この時朝廷では光圀を權中納言に任じましたが、光圀は、

『私の様に朝廷に出入りもいたさず、その上この様に隱居した者が、その様な高い位をいたゞくことはまことに勿體ない。』

と、お斷りいたしましたが、幕府の者たちは、

『水戸家は代々その位をいたゞくのであるからお受けした方がよい。』

と、すゝめましたので、光圀もしかたなく、有り難くお受けいたしました。けれども光圀は高い位をいたゞく事が天皇に對して忠義であるわけではない。と考へ、

位山登るも苦し老の身は

麓の里ぞ住みよかりける

といふ歌をよんで、相かはらず、大日本史の編纂をつゞけてをりました。

この西山といふ所は水戸の北の方五里ばかりの所にありまして、住居まことに質素なものでありました。その歴史をしらべたお部屋なども僅かに三疊の間でありまして、机の前の窓の外には、一本の梅の木がはえてゐました。春の來る度に光圀は、仕事の疲れをこの梅によつて慰めたのでありませう。この隱居所はその後焼けまして、今ありますものは、その後建てたものでありますが、その梅だけは昔のものであるといふ話であります。

光圀はここにをります間、天下の副將軍水戸家のご隱居様であるといふ様子はすこしもなく、粗末な着物を着、偉ぶつた様子は少しもなく、時々その邊に田を耕してゐる百姓たちにまで心易く言葉をかけました。こんな時光圀はほんとに百姓の後隱居様ではないかと思はれる程であつたといふことであります。ですから領内の者ばかりでなく、日本の人たちは誰も水戸黄門様と、かへつて尊敬いたしました。黄門とは日

本の中納言といふ役目は支那の黄門といふ役にあたりますので、この様にいつたのであります。

光圀は七十三歳でなくなりました。そこで大田町の北の方にある瑞龍寺といふお寺に葬り、義公と諡いたしました。後朝廷は義公に從二位權大納言を贈られました。明治三年明治天皇は、光圀の大日本史を著し、我國體を明かにした功をおほめになつて、從一位を贈られ、光圀と烈公とを祀つてある水戸の常盤神社を別格官幣社に列せられました。越えて三十三年には更に正一位をお贈られになりました。

1 家康は學問を以つて世を治めようと考へ、林道春などの學者を招いて家來に學問を敎へさせ、又本をしらべさせた。

2 幕府が學問を盛にしたのと一緒に日本中に學問が盛になつた。

3 德川光圀は水戸の藩主で學問をすゝめ、多くの學者を集めて日本の歷史をしらべさせた。大日本史といふ本がそれである。

4 光圀は大日本史を著して國民は皇室を尊ばねばならないことを人々に知らせた。

5 光圀は儉約をすゝめ、西山に隱居した後も至つて質素なくらしをしてゐた。

第四十一　大石良雄

一　犬公方樣

五代將軍綱吉、は家光の子で兄家綱のあとをついで將軍となりました。學問に熱心で小さい時から林信篤について學問を習ひ、將軍になつてから後も自分から學問を講じて人々にきかせました。

綱吉は學問に熱心であつたばかりでなく、心から朝廷を尊び、すたれてゐた儀式を興し、皇室を賑はゝせました。靈元天皇は皇子朝仁親王を皇太子になされましたが、

皇室御衰微のために立太子禮をさへおあげになることが出來ませんでした。立太子禮の行はれなかつたのは、この時ばかりではありません。吉野の朝の時分からすたれてゐたのであります。そこで綱吉は親王のために立派な立太子禮を擧げました。又この親王が天皇の御位におつきになつた時にも、後柏原天皇の時より大方二百年間絶えてゐました大嘗祭を復興いたしました。

又天皇の御料はこれまで三萬六千石でありましたものを、綱吉は五萬二千石に增しました。しかし、一人の大名でさへも、何十萬石、何百萬石と領してをりますのに、天皇が僅かにこれだけの御料しかお受けにならなかつた事は、誠に畏れ多い事でありました。

綱吉は又御歷代の山陵が廢れるがまゝになつてゐたのを修理いたしましたなど、德川時代での珍しい感心な行でありました。

綱吉はこの樣に學問にも、政治の方にも力をつくしましたが、一方佛敎を信ずる心があつく、護國寺とか、護持院などといふ大きな寺を費用かまはず作りました。護持院

といふ大きなお寺を神田橋の所に作りましたのも、世嗣ぎの子供がないのを悲しんで、子供の生れるのを祈るために建てたのであります。ところが子供の生れないのはいくら神樣や佛樣に祈つてもだめなのはわかりきつたお話でございます。それで護持院の隆光といふ綱吉に信用のある坊さんが、こんどは

『將軍樣にお子樣のお生れにならないのは、前世に多くの生物をお殺しになつたその報いでございます。ですから、お子樣が欲しうございましたら、日本中の者に殺生をすることを止めさすのがよろしい。その上將軍樣は戊の年にお生れでございますから、犬を大切になされるがよろしい。』

と、ほんとらしい樣な嘘らしい樣な事を申し上げました。すると綱吉は早速それを信じて、まづ獵師といふ仕事はしてはならない。といふ規則をはじめとしまして、犬や猿など生物を見世物としてはならない。小鳥や、魚などを飼つてはならない、といふ規則を出し、もつと進んでは鳥や獸の名を人の名につけてはいけない。といふことになりました。ですから、昨日まで鶴吉さんといつた人が早速千吉さんだとか松吉さんだとか

いふ名にかへなければならず、龜造さんは萬造さんか海造さんにその名をかへなくてはならないなどの滑稽が起つてきました。ところが、これ位はまたよい方でありまして、百姓の爺さんが、自分の田に下りてきた雀を追つたといふ事で、牢屋へ入れられたり、おさんどんが勝手元へはいつた泥棒猫をたゝいたといふので、流者になつたり、鳩に石をなげたといふので江戸を追ひ出されたといふ人々が至る所に出來てきました。かうなつては鳥や獸が大喜びでございます、烏はたべたいだけ柿をたべました。鳶がいくら油揚をさらつても平氣でピートロ〳〵と輪をまき、犬は大威張りで魚屋の生魚を食べてあるきました。けれども百姓や魚屋も叱るわけにも、たゝくわけにもまゐりませんでした。まして犬殺しなどは一人もをりませんから、江戸の町などは犬で一ぱいになつて、それが人間にかみついても、人間の方で お『これは失敬をいたしました。』と頭を下げて逃げて行かねばなりませんでした。

しかしそれ位では綱吉はまだ滿足しません。大久保の邊に二萬五千坪の犬屋敷をこしらへまして、野良犬を飼ひあつめました。するとたちまち滿員になりましたので、こんどは中野の邊へ十六萬坪の犬屋敷を作りました。ですから晝も夜もワン〳〵、キャンキャン、大久保や、中野の邊の者は夜も寢られませんでした。こんな有樣でしたからこの時分の人は綱吉の事を犬公方樣と惡口をいひました。

折角の學者公方樣が、犬公方樣になつただけでも惜しい事でありましたのに、綱吉はそろ〳〵政治にあいてきました。そして謠のお稽古をはじめました、やがてお能をやり出しました。將軍樣がお能をはじめましたので、大名も侍も我劣らじとオー〳〵とうなり出しました。

こんなあそびをしたり、寺を建てたりいたしますと、だん〴〵お金がたりなくなつてまゐります。そこで今まであつた金貨や、銀貨を鑄つぶして、その中へ金貨には銀、銀貨には銅や錫、もつとひどいのになりますと、鉛を入れてうんと惡いお金をたくさん作りました。すると、にはかに物の値段がたかくなつてきました。ところが、物の値の高いのをこまるものは百姓や町人だけで、大名も侍もお米をもらつてゐるのでございますから、米の値段があがれば程、お金持になつて、みんなが贅澤をはじ

めました。

武士が毎日遊んで贅澤をいたしますと、百姓の方でも、何か武士にまけない事がしたくなりました。そこで、みんなが侍たちにまけない美しい着物を着出しました。そして武士がお能を見るなら、こちらは芝居をみようと毎日お芝居を見に出かけました。

かうなりますと、日本中は、上も下もみんな奢侈に流れて、まことになげかはしい世の中となりました。丁度この時代の年號を元祿といひましたから、この時代を元祿時代といつて、今日にまで惡い評判をのこしました。

二　赤穗の義士

上も下も奢侈と遊惰とに流れて、武士は蒔繪で飾つた細い刃を腰にさして戰ゝ事などはすつかり忘れて和歌よ、謠よと騷ぎ、町人は美しい着物で、花見よ、お芝居よと遊びまはりました。ですから日本はたゞ女の寄りあつまりの樣に、少しの强い所も、

元祿武士の風俗

勇ましい風もなくなつてゐる時、ここに人々を驚かす忠烈、義烈な事が行はれました。それは播州赤穂の浪士四十七人が、主人の仇を取つた事であります。

事の起りは元祿十四年の三月の事でありました。この月天皇と上皇との御使が幕府へおいでになりました。このお使は特別のご用でいらつしやつたのではなく、幕府は毎年お正月になりますと、朝廷にお金やその外のものを奉りますので、朝廷からは毎年そのお禮の勅使が幕府にお下りになるのでありました。この時のお使もその使でありましたが、幕府では毎年この御使に對しては、出來るだけ丁寧にお接待申し上げました。これまでも幕府には儀式や、接待役に高家といふ役が置いてありますが、この勅役使に對してはその外に饗應役を作りまして、おもてなしをいたしました。この饗應は自分のお金を出してその役目をつとめるのでありまして、ずゐぶん費用もかゝりましたが、とに角名譽な役目でありますから、饗應役をいひつけられた大名たちは大切にそれを勤めました。で、この時の饗應役は播州赤穂の城主淺野内匠頭長矩、伊豫國吉田の城主伊達宗春にあたりましたが、萬事は高家の筆頭、吉良義央に相談してす

ることになつてゐました。

淺野長矩は淺野長政の子孫でありまして、領地は五萬三千石でありますが、本家は廣島にある四十二萬石の大藩でありますから、その費用などについては出すにこまるといふ樣な事は少しもありませんでした。

けれども、一旦は

『この樣な名譽の役を仰せつけて下さつた事は有難い事でございまするが、私は禮儀作法にもなれてをりませず、萬一不調法をいたしましてはお上に對してもすみませんから、どうぞその方に明かるい方にお命じ下さいます樣に。』

と、斷りましたが、老中の人たちは、

『その心配には及びません。何事も高家の吉良上野介が知つてをりますから、あなたは一々上野介とご相談になつておやりになりますれば結構おつとまりになります。』

といひましたので、内匠頭もそれではと、お受けしたのでした。

さて、その吉良上野介といふ人はどんな人でありますかといへば、實は足利時代からつづいてゐる立派な家柄で

祿高は三河上野の中でたつた四千二百石しかもらつてはをりませんが、長い間幕府に仕へて儀式、作法の事にあかるく、位は從四位左近衛少將にまで進んで高家の筆頭をつめてをるのであります。

ところがこの吉良義央はなか〳〵の慾張りで今までも自分の所へお金や品物を持つてくれば丁寧に敎へるが、それでないと少しも親切に敎へてくれません。それで今度も義央は

『淺野は金持だ、ずゐぶんお金を持つてくるにちがひない。』

と待つてをりました。淺野の方では、

『身分ある人に對して多くの物を持つて賴みに行くなどは賄賂を持つて行くも同じだ、たゞ失禮のない樣御挨拶をしておきなさい。』

と、自分が正しいだけにたゞ家來をやつて挨拶だけをさせました。吉良の方では大へんな宛ちがひ、

『淺野といふ奴は見かけによらない客嗇な奴だ。もし客嗇でなければ失禮な奴だ。そちらがそんな量見ならば、こちらもその量見で行くぞ。』

とすつかり怒つてしまひました。そんなことは知らない長矩は又改めて自分で義央の所へ出かけまして、

『この度勅使の饗應役を仰せつけられましたが、何を申しますも田舍侍の事、何の禮儀もわきまへてをりません。何かにつけよろしく御指圖の程をお願ひいたします。』

と、挨拶しましたが、義央は腹がたつてゐる所でありますから、

『勅使の饗應については私も不案内、お指圖などは出來ません。何事もあなたのお考へ通りになさいませ。な、お勝手にぢや。』

と相手になつてくれません。長矩はかさねて、

『御老中より、こんどの事は何事もあなたの御指圖を受けよとの御命令でございます。そんな事を仰つしやらずにどうぞお敎へ下さいませ。』

と、頭を下げてたのみました。上野介は、

『それ程御頼みとあれば申しますが、第一に御進物ぢや。勅使にも、院使にも、そしてその他の者にもぢや。ハハ……わかりましたか。』

と、卑しい賄賂の催促をそれとなくいたしました。でも内匠頭は正直な人ですから、

『進物とは可笑しい。そんなことをするのかしら。』とそのあとで老中の一人にその事をたゞしますと、老中は、

『御進物をあげる樣な事は前からありませんよ。』

と答へました。この事が又上野介に聞えまして、

『内匠頭は何といふ不都合な奴ぢや、人が内密でいつたことを老中にいふといふ事があるものか。』

と、ます〳〵怒り出しました。

一方院使の饗應役になりました伊達左京亮は、吉良の慾張りを知つてゐましたから、たくさんのお金を送りましたので、上野介はなんでもよろこんで敎へました。

勅使院使のお休息になる場所についても、伊達の方は普請も仕直し、壁も塗りかへ、

疊も入れかへることをうまく敎へましたので、前からその仕度が出來てゐましたが、内匠頭の方へは、『たゞ掃除だけしておけばよろしい。』といつたきりでしたので、淺野の方はたゞ掃除をしておいたばかりでありましたが、もう勅使の御入りになるのは明日だといふ日になつて、それではいけないといふことがわかりましたので、淺野はにはかに大工を入れたり、左官を入れたり、疊を入れかへたりの大騷ぎをせねばなりませんでした。その時内匠頭は一晩の中に二百疊あまりの疊を入れかへたといふ事であります。これだけでも大變でありましたが、壁の方は一晩には乾きまん、しかたなく、炭火で乾かしました。それにつれて、つかつたお金だけでも大變なものでありました。すると上野介は、『よい氣味だ。うんと金を使へ。』とかげで笑つてをりました。

さていよ〳〵三月十一日に勅使院使が江戸へおつきになりました。その時も、内匠頭は品川までお迎ひに行くのか、行かないのであるかを上野介に尋ねましたが、上野介はわざと仕損じをさせやうと、行くべきものを、行かないでもよいといひましたので、内匠頭があとで氣がついて出掛けた時は、もう時刻におくれてをりました。内匠

頭も、『さては上野介は私の失策をまつてゐるのか。』と氣がつきますと、殘念でたまりません。けれども今腹を立ててはは大切の御役目がつとまらないと、ぢつと我慢をしてをりました。

勅使の御仕事は、第一日は天皇、上皇の御言葉を將軍におつたへすること、第二日は幕府のおもてなしを受けること、第三日は將軍の奉答の式があり、それからは增上寺や寛永寺にお參りになるのでございました。その第一日はとに角すみました。内匠頭は上野介の意地惡のために何かにつけて不愉快でたまりませんでしたがそのまゝ屋敷へ歸りました。その二日目の事でございました。やつぱり上野介の意地惡い態度に斬りつけてやりたいとまで思ひましたが、『もう明日一日を辛棒すればよいのだ。』とそれをあてにこらへてをりますが、腹の立つ事はすこしもなほりません。そこへ持つてきて、勅使へ出したご馳走の事から上野介が、

『伊達殿はお年の若いのにもかゝはらず、何かとお氣がおつきになります。あなたはたとへ赤穗の鹽濱育ちだといつても、少し位禮儀を知つてゐても損はなからうと思

ひますよ。』

と、大勢の人中で恥をかゝせましたので、正直な内匠頭は、『おのれ待て上野介。』と思ひましたが、丁度その時後の方で、

『内匠頭殿。』

と聲をかけた人があります。内匠頭がふりむきますと、戸澤下野守といふ人でございます。下野守は小聲で、

『内匠頭殿、ご辛棒なさいませよ、大切な場合でございますよ。』

とやさしくいつてくれました。内匠頭もその言葉がうれしく、そのまゝその日は役目をすまして屋敷へかへりました。

その晩また下野守が淺野の屋敷へ行きました。内匠頭はよろこんで迎へて、

『今日はいろ〳〵御注意下さいましてありがたう存じました。』

と、禮をのべますと、下野守は、

『それにつけてまたお伺ひいたしました。お腹も立ちませうがお忍び下さい。私も先

年日光で勅使饗應役になりました時、あの强慾な上野介の指圖にあひまして、己れたゞ一刺にと幾度思ひましたか知れませんでしたが、やう〳〵心を押へて今日になりました。一時の怒りに身を失ひ、家を失ひ、先祖を恥しめ家來たちにも迷惑をかけることとなりましてはなりません。もうあと一日、それまではしつかりとお務め下さい。いらぬさし出口とお思ひでせうが、ご心中をお察しして申し上げます。』

と、親切にいつてくれました。内匠頭も、

『わざ〳〵お出で下さいまして御親切な御意見ありがたうございました。必ず注意をいたします。』

といひましたので戸澤下野守も安心して歸りました。

十四日になりました。最後の日でございます。將軍が、勅使に逢ふ所は白書院といふお部屋、饗應掛やその他の者は松の廊下といふ所で勅使、院使のいらつしやるのを待つてゐました。

内匠頭が上野介にいぢめられてこまつてゐるのを見ますと、脇にゐた人たちも氣の

毒でたまりません。で、その時そばにゐました、品川豊前守といふ人が、見るに見かねて、

『内匠頭殿、今日の次第書が老中から出てをりますが、それを御覽でしたか、それをご覽にならないでは、今日のお役目がつとまりませんよ。』

と注意しました。内匠頭は早速上野介の所へ來まして、

『上野介殿、今日の次第書が出たさうでございますがお持ちでございますか。』

と、尋ねました。上野介はその次第書を伊達左京亮にはちやんと見せてゐましたが、内匠頭には見せなかつたのでございます。それで今内匠頭が尋ねても、

『左様それは出ましたが、お見せする必要もありますまい。あなたはよくご存じでせうから。』

と、そらとぼけたことをいつてをります。内匠頭は、

『いや少しも存じません。それを存じませんではお役目がつとまりません。是非に拜見……。』

『是非にとは何だ、失禮な。』

『失禮はおわびいたします。どうぞ拜見させて下さいますやう。』

と、いつてゐる折も折、梶川與惣兵衛といふ旗下の侍が將軍のお母様桂昌院の御便として内匠頭の所へきまして、

『式の終りました時、桂昌院様も勅使にお目にかゝりたいと申されてをります。どうぞその時刻を私までお知らせ下さい。』

といつてきました。内匠頭は、

『承知しました。』

と答へますと上野介は、

『ご用がありますれば私にいつて下さい。出迎への作法さへも知らぬ内匠殿にはその時刻もおわかりになりますまい。』

と、そのまま向ふの方へ行つてしまはうといたしました。行かれては大變と、内匠頭は、

『暫くお待ち下さい。その次第書を……。』

と、上野介の着物の袖を引きとめようとしますと、上野介は、

『邪魔をなさるな。』

と手に持つてゐた扇子でポンと内匠頭の手を拂はうとしました。それがあいにく内匠頭の烏帽子にあたつて烏帽子がバタリと下に落ちました。昔から殿中や、宮中でその烏帽子を落してはもう役目がつとまらないものとなつてをります。内匠頭も絶對絶命、

『上野待てッ。』

と、物すごい聲を出したかと思ひますと、ふりむく上野介の顏をめがけて、サッと斬りつけました。折よくか折惡くか刀は上野介の烏帽子の鐵輪にあたつて僅かな傷しかつきませんでしたが、慾の深いに似ず臆病な上野介は、

『内匠が氣狂ひになつた。』

と大聲をあげながら逃げ出さうとする所を、内匠頭は後からもう一太刀斬りつけましたが、それを抱きとめたのが梶川でございます。梶川は旗下一番の強力者、その上、

上野介とは懇意の間柄でございますから、

『殿中でございまするぞ。』

と内匠頭を押へつけましたので、二の太刀もうまく斬りつけることは出來ませんでした。そこへ茶坊主が來て内匠頭の刀をとつてしまひました。

上野介は流れる血汐に顏をそめながら、宵滅法に逃げ出しましたが、丁度向ふから出てきました脇坂淡路守といふ大名にぶつかつて、顏の血を淡路守の着物にぬりつけてしまひました。淡路守もふだんから上野介をよく思つてをりませんでしたので、よい氣味だと、大きな拳をかためてその横面をなぐりつけました。上野介は刀では倒れませんでしたが、その拳骨でそこへ倒れてしまひました。あとになつて刀の傷はすぐなほりましたが、横面に出來た瘤は中々なほりません。上野介も、お醫者も、内匠頭ほどたなかつた筈だが、この瘤はどうした瘤だと不思議がつたといふ事であります。

この時淡路守はきつと笑つてゐた事でありませう。

殿中はこの騒動のために上を下へと混雜いたしました。そこで内匠頭の役目はすぐ

に戸田といふ大名がかはつて、つとめることになりました。

淺野内匠頭は、その場から田村右京大夫といふ大名にあづけられました。その時田村の屋敷は芝の愛宕下にありました。内匠頭は罪人として籠でここまで送られ、改めて將軍から、

『内匠儀今日の所爲甚だ不埒に付、當日切腹申し付ける。』

といふ命令が下がりまして、その切腹の檢使として莊田安利、多門傳八郎の二人が田村の屋敷へまゐりました。

たとへどんな場合になりませうとも、御殿の中で人を傷つけようとした事は内匠頭の手落ちでした。上野介の方はこはくて逃げたくせに、言葉だけはうまく、

『私は内匠頭に何の恨を受ける樣な事はいたしませんでした。全く内匠頭が惡いのでございます。それで私は何の手向ひもしなかつたのでございます。』

とうまくいつたのであります。

ところが大名が切腹いたす時には、やはりその作法があるのでございますが、この

莊田といふ役人は上野介最員の人でございますので、將軍の命令をつたへたあとで、右京太夫に、

『内匠頭は將軍のお怒りにふれた者であるから、大名の作法によるには及びません。庭前で切腹さしてよろしい。』

といひました。その時多門といふ人は、

『たとへ將軍のお怒りにふれませうとも、一城の主、それを役も位もない平侍同樣に庭前で切腹とは誰の命令でございますか。』

と尋ねましたが、莊田は、

『下役の者がよけいなさしでロをしなくてもよろしい。』

と叱つてそのまゝ庭さきで切腹することになりました。その時、内匠頭の家來、片岡源吾右衛門といふ人が、田村の屋敷にかけつけまして、

『主從今生の暇乞に、たゞ一目お目にかゝらせて下さい。』

と、涙を流しながらたのみました。多門は内匠頭を氣の毒に思つてゐるのですから、

『あゝよろしいとも、お逢ひなさいませ。』

とこれを許しました。その時内匠頭は縁側近い所に座つてゐました。源五右衛門は庭の上に兩手をついて、たゞだまつて主人を見上げました。内匠頭もだまつて見下しました。そしてその目と目とがぴたりとあつた時、兩方の眼はたゞ涙が一ぱいになつてゐました。

『御心靜かに』

『おゝよく尋ねてくれた、あとをたのむぞ。』もう庭の隅からは悲しい闇がひろがりかけてをります。片岡はそのまゝそこを下りました。

内匠頭の亡き骸は、片岡源五右衛門と磯貝十郎左衛門といふ二人の家來が受取つて高輪の泉岳寺に葬りました。

その翌日の事でした。淺野の本家から、

『昨日内匠頭は庭上にて切腹と承りました。それは何人の指圖でございましたか。』

と、田村の所へききにきました。右京太夫はこれは困つたと、

『それは莊田殿のお言葉でございましたが、或は老中とのご相談によつておきめになつたものかも存じません。一應伺ひましてから御返事いたします。』

と、その事を幕府に問ひあはせました。幕府でも早速莊田を呼び出して尋ねますと、莊田は『つい氣がつきませんでした。』と、うまくごまかさうとしましたが、多門は、

『いえ私が御注意いたしましたが、下役の差出口と叱られましたのでございます。』

とその時の樣子を話しましたので、莊田はとう〳〵免職になつてしまひました。

淺野の家はどうなつたかと申しますと、お家は斷絶、城も領地も幕府へ取り上げられ内匠頭の弟の大學は閉門になつてしまひました。

赤穗の城の留守居をしてをりましたのは大石良雄といふ家老でございます。内匠頭が切腹になつたといふ報せが三月の十九日に赤穗に屆きました。この知せで良雄はすぐ三百餘名の士たちを城の中に集めてこれから後の相談をいたしました。相談は三日にわたりまして、なか〳〵まとまりません。良雄と同じ家老の大野九郎兵衛等は、

『城の中のお金をみんなでわけて、城は幕府に明け渡し、家來一同はどこへなりとも

行つてしまはう。』

といふのであります。も一つの意見は、

『命の限りこの城に立て籠つて、差し向けられた軍勢を相手として潔く討死して殿様のお供をしよう。』

といふのであります。その時良雄は、

『成程籠城とは勇ましい御覺悟、私もそれに賛成いたします。』

といひました。こんな大變な相談がきまりましたので、大野はじめ臆病連中にはその後の相談には誰もまゐりません。いよ〳〵討死と覺悟をするから、と最後の相談の時にはたつた六十人程しかありませんでした。その時になつて良雄ははじめてその本心を話しました。

『死ぬるまでも殿の御供と覺悟の程は私も感心いたしました。定めし殿様も地下でおよろこびの事と存じます。しかしこの六十何人がここで城を枕として討死いたしましても何の甲斐もありませぬ事、かへつて世の物笑ひになるかも知れません。それ

よりも幕府の命令通りこの城をあけ渡した上で、立派に腹を切つて殿様のお供をいたしてはいかゞでございませうか。』

といひました。もとより忠義の六十人の事でございますから、

『それはよろしうございます。』

といひました。そこで、良雄は尚念のために、死んでも殿様のお供をしたいといふ人たちの名前をかゝせて、めい〳〵それに血判をおしてもらひました。そのあとで良雄は、又、

『その御決心を拜見しました上は私の本心を申し上げます。私は幕府に叛いて戰をしようなどとは思つてをりませんでした。たゞ不都合な吉良上野介をあのまゝにしておきましては、定めし殿様も殘念であらうと思ひます。そこで我々六十名の者は城を明け渡した上は一同心を協せて上野介を打ち取りたいと思ひまするが、皆さんは如何でございますか。』

と尋ねました。一同の者は、

『それこそ家來とし武士としての立派な行でございます。萬事はあなたのお指圖にお任せいたします。』

と、ここで大切な相談がきまりました。

こんな相談がきまらうとはその他の家來も世の中の人も知りません。たゞ良雄たちは城を枕に討死するさうな。といふ噂が高くなつて行きました。

それが淺野の親類たちにも聞えますと、それは大變だと、內匠頭の弟の大學からも、

『それは幕府に對してもよくない。立派に城を明け渡してくれ。』

と使がきました。そこで四月十一日に、もう一度城の中で相談會を開きました。もうこの時になりますと、戰はしないときまつてをりますので、大野はじめ臆病者連中もみんな城にあつまりました。その時大野たちは、

『それご覽なさい、偉さうな事をいつても、どうせ城を渡さねばならないのだ、だから私ははじめからさういつたのだ。』

『さうですとも。』

と、良雄たちは笑つてをりました。良雄たち六十名のものは、もう覺悟をきめてあるのですから、笑はうが、惡口しようが知らぬ顏で、

『それではいよ〳〵城を明け渡す。』

といふ事にきめました。それから城の中をすつかり整頓しました。十三日には城の中にあるお金をみんなにわけました。この時も良雄は、そのお金の中から、淺野家を再興する時の準備のお金をのこし、又內匠頭の奧樣瑤泉院の生活費をのこし、又お寺へ寄附するお金などを差引いて、その殘りを皆にわけることにしました。そして、

『このお金をわけますには、私共の樣にたくさんの祿を戴いてをりますものは、ふだんからこんな場合の準備もしてございますが、祿の少ない方々はさぞおこまりでございませうから、祿が多いから多くとるといふ樣な事でなく、皆同じ樣におわけしてはいかゞでせう。』

といひました。心の正しい人たちは、

『それはまことによい別け方でございます。』

と、賛成しましたが、大野等は、

『よけいな寄附金まで取られて、そのあとを同じ様にわけるなんかは不都合だ、祿高によつて按分しなければならない。』

と、慾ばりをいひ出しました。良雄は又すなほに、

『それでは大野さんたちの御考に從ひますが、いかがでございます。』

と尋ねましたが、祿の多い者たちは自分の得になることですからだまつてゐますし、祿の少ない者は遠慮してこれもだまつてゐました。やがてお金は大野のいつた通りにわけられました。大野たちは大金をもらつて、

『お金をもらつた上は、もうこんな所に用事はない、はい左様なら。』

と、歸つて行きました。良雄は自分の分け前をもらひますと、

『私は別にこまつてをりませんから、これは、皆さんにおわけ下さい。』

と、祿の少ない人たちにわけてやりました。ほんとに同じ家老でも大野と大石とは炭と雪程の相違がありました。

この時、岡島といふ人がお金をわけたのでありますが、あまり大野のいふことが癪にさわりますので、大野が歸るとすぐ、

『あんな恩知らずの慾張りを生かしておいては淺野の恥だ、刺し殺してやる。』

と、後を追ひましたが、大野はこんな様子を知つてゐたと見えて、その晩すぐに息子と一緒にどこかへ逃げて行つてしまひました。

四月の十八日に城受取の役が幕府からきました。その時大石良雄は、

『どうぞ内匠頭の弟大學に淺野家の相續をおいひつけ下さる様お取成しを願ひます。それをおきき屆け下さりますれば、私共は城をお渡ししますと同時に一同自殺しまして、死んだ殿様のお供をいたします。』

とたのみました。使の人たちも大石の願を氣の毒に思ひ、

『御道理なお願ひ、きつとお願ひいたして見ませう。』

といつてをりましたが、その後になつてもその事は出來ませんでした。

城を渡した後の赤穗の家來たちはめい〳〵別れ別れになりましたが、大石良雄たち

忠義の一組はうまく連絡しあつて復仇の日をまつてゐました。

良雄はまづ妻や子供を妻のお父さんにあづけて、京都の近くの山科といふ所に住所をもとめました。この良雄の家を中心として忠義の人たちは江戸の様子を伺ひながら時の來るのをまつてゐました。

その後吉良の方はどうなつたかといひますと、その時は何の御咎もありませんでしたが、その子の上杉綱憲（米澤の藩主）は幕府にお願ひして役目をおことはりしました。そして上野介はうつかりしてゐては淺野の士に怪我でもされてはたまらないと家の中ばかりにをりました。

幕府の方でも今まで吉良の屋敷は呉服橋にありましたが、それを本所の松坂町へかへてしまひました。上野介は松坂町にうつつてからも何となく氣持がわるくてたまりません。もしか淺野の家來が仇を取りに來はしないかといつも人を方々にやつて様子をさぐらせてゐました。そして自分の家には上杉の方から、劍術に上手なものを呼び入れて自分の番をさせてゐました。口はどんなにごまかしても惡い事をしては自分の

心が許さないのであります。そして恐ろしいのであります。自分の心が自分の身をせめるのであります。

山科に移りました良雄はわざとお酒をのんだりしてそんな仇討のことなぞは忘れてしまつたかの様な風をしてをりました。しかし、その間にもどうか内匠頭の弟が淺野家を再興する恩命が下る様にと願つてゐましたが、十五年の七月にはそれもだめになつて、知行さへも取り上げられて、廣島の淺野にあづけられる事になつてしまひました。すると先きに同盟を約束した六十人の中からも、その仲間から出て行く様な人が出來てきました。そこで良雄は仲間の大高源吾等にいひつけて、

『淺野家の再興もだめになりましたから、今迄の約束も取り消したいと思ひますから御約束の證書はおかへしいたします。』

と、かへさせに歩かせました。これは、

『この上はいよ〳〵仇討だ。それには尚更しつかりとした決心の者ばかりでなければやることが出來ない。皆はどんな考をしてをるのか。』

と、しらべてみようと思つたのであります。ところが、

『左様でございますか、それでは。』

と、證書をかへしてもらふ者もありました。又中には、

『そんな事があるものですか、私たちの決心は既にきまつてをります。内藏助殿がそんなお考でしたら、私たちは勝手に仇討をいたします。』

と、立腹するものもあります。こんな人々へは、大高源吾が、

『實はいよ〳〵仇討を決行いたしますので、お考はどうかとご相談にあがつたわけであります。』

と、わけを話して、めい〳〵江戸へ下ることにいたしました。

江戸へ下つた遺臣たちは吉良の様子を伺ふためにいろ〳〵な苦勞をしました。或人は蕎麥屋になつて松坂町の邊をチリン〳〵と賣りにあるきました。或人は八百屋になつてその近所に商をいたしました。大高源吾なども討入の前日煤竹を賣りながらこの近所を歩いてゐたといふ事であります。吉良の様子は大方さぐれました。同志の人々

からは、

『どうか早く江戸へ來て下さい。』

と大石良雄の所へ度々使がまゐります。そこで良雄もいよ〳〵山科を出ることになりました。しかしうつかりここを出て吉良の方へ、

『それ大石が江戸へ下る。』

と感づかれては大變ですから、一旦京都のあるお寺に移り、ここで名をかへ姿をかへて、まづ息子の主税を江戸へ下つて、そのあとから自分は垣見五兵衛といふ名で江戸へ下りました。江戸へついたのは十一月五日の日でありました。同志の人々は、

『さあ統領も來た、いよ〳〵決行の時が來た。』

と喜びあひました。その間にも様子をさぐりますと、上野介は十二月の十四日茶の湯の會をするといふ事がわかりました。すれば、その晩は家に居るにちがひない。その晩に討入らう。と、そこで十二月の二日の晩に深川の八幡様の近所の料理屋に一同があつまつて最後の相談をいたしました。この時集まつた人は四十七人、名は次の通り

であります。

堀部彌兵衛金丸（七十六歳）
吉田忠左衛門兼亮（六十二歳）
村松喜兵衛秀直（六十一歳）
奥田孫太夫重盛（五十六歳）
貝賀彌左衛門友信（五十三歳）
木村岡右衛門貞行（四十五歳）
大石内藏之助良雄（四十四歳）
早水藤左衛門光堯（三十九歳）
寺坂吉右衛門信行（三十八歳）
岡島八十衛門常樹（三十七歳）
片岡源吾右衛門高房（三十六歳）

間喜兵衛光延（六十八歳）
間瀬久太夫正明（六十二歳）
小野寺十内秀和（六十歳）
原惣右衛門元辰（五十六歳）
千馬三郎兵衛光忠（五十歳）
中村勘助正辰（四十四歳）
菅谷半之丞政利（四十三歳）
前原伊助宗房（三十八歳）
神崎與五郎則休（三十七歳）
横川勘平宗利（三十六歳）
茅野和助常成（三十六歳）

三村次郎左衛門包常（三十六歳）
潮田又之丞高教（三十四歳）
堀部安兵衛武庸（三十三歳）
倉橋傳介武幸（三十三歳）
武林唯七隆重（三十二歳）
矢田五郎衛門助武（二十八歳）
杉野十平次次房（二十七歳）
村松三太夫高直（二十六歳）
奥田貞右衛門行高（二十五歳）
磯貝十郎左衛門正久（二十四歳）
岡野金右衛門包秀（二十三歳）
間瀬孫九郎正辰（二十二歳）
大石主税良金（十五歳）

赤垣源藏重賢（三十四歳）
近松勘六行重（三十三歳）
不破數右衛門正種（三十三歳）
富森助右衛門正因（三十三歳）
大高源吾忠雄（三十一歳）
吉田澤右衛門兼貞（二十八歳）
小野寺幸右衛門秀富（二十七歳）
大石瀬左衛門信清（二十六歳）
間十次郎光興（二十五歳）
間新六光風（二十三歳）
勝田新左衛門武堯（二十三歳）
矢頭右衛門七教兼（十七歳）

いよ〳〵討入でありますが、上野介は十四日の晩茶の會をひらきまして、お正月になるまでに麻布の上杉の屋敷に引き移ることになつてゐたのであります。ですからこの日をはづしては、いつまたよい折があるかわかりません。そこでその十四日の晩一同は吉良の屋敷へ押し寄せて、殿様の恨をはらさうとしたのであります。

その十三日は雪が降りました。あけて十四日は内匠頭の命日でありますので、一同は泉岳寺にお參りいたしました。そこで寺の一室を借りまして、明日の手筈をきめました。

四十七人は二手に分れ、二十三名の一隊は良雄を大將として表門に向ふこと。二十四名の一隊は良雄の子良金を大將として裏門から討ち入ること、

集る所は本所林町の堀部安兵衛の宅と、同じ三つ目横町の杉野十平次の宅と、同じ二つ目相生町神崎與五郎の宅の三ヶ所、

時刻は午前の二時、

合言葉は『山』といへば『川』といふこと、

その他いろ〳〵の打合せをしましてそれ〴〵別れました。

その十四日の晩、めい〳〵はなればなれにこの三ヶ所にあつまりました。一同は火事場裝束に身をかためまして、丁度四時頃松坂町に向ひました。雪はやんで月が物凄く光つてゐました。長い辛苦が今宵報いられるのかと思ふと十二月の寒い夜風も心地よい位に思はれます。まして主人の仇をかへさうと血に燃えてゐる人々ですから風も雪も物の數ではありません。刀の目釘のつゞくかぎり、根かぎり斬つてきつて斬りまくつて、主人の靈をなぐさめようと、勇ましくも覺悟をきめてゐるのであります。

有明方の月は眞白な江戸を照してをりました。同志の者たちは手筈の如く表門と裏門から門を打ち破つて吉良の屋敷に亂入いたしました。驚く門番を縛り上げ、手向ふ者は斬り倒して奥へ奥へと進んで行きました。しかし容易に進めたわけではありません。屋敷の中にはもしやこんな事がありはしないかと、いつも要心のためにたくさんの劍術の上手な者を置いてありました。それらの者は、

『さては來たのか。』

と烈しく防ぎ戰ひます。四十七人の者はみんな劍術にすぐれた者ばかりではありませんが忠義のためにたゝ死を覺悟してをるのでありますから、面もふらずに戰ひました。雪の夜の靜かな屋敷もにはかに修羅の巷とかはつて襖に飛びかかる血汐、疊に横たはる死屍、その物すごさはたとへ樣もありません。でもこの四十七人の人々はとりましては、門番も劍術使ひも、家來たちも、當の相手ではありません。めざす所はたつた一つの上野介の首であります。『邪魔すな』『そこどけ』とかねてしらべておきました上野介の寢室まで押し寄せて行きました。『それッ』と襖をひらきますと、床はとつてありますが、中はもぬけのから。

『さては逃げたのか、ここで逃げられては長い間の辛苦も水の泡となつたのか。』

と、一同は茫然として、今まではりつめてゐた心をどうしてよいかわかりません。

『とにかく探せ。』

と天井から床の下、便所の中までさがしましたが、やつぱりをりません。

『折角の眞心も、神にも、佛にも通じなかつたのか。』

と、一同は力なく一所に集りました。

『もうこの上はこの屋敷に火をかけて、一同はその火の中で腹を切つてしまはう。』

といひだしました。この時、吉田忠左衛門はさすがお爺さんだけに、

『早まらしやるな。腹はいつでも切れる、一度切つた腹は縫ひあはしても役にはたゝない。探し樣が足りないのだ、さあもう一度。』

といひましたので、一同の者も成程と、手を分けて家中を探し出しました。その時、忠左衛門が臺所を行きすぎようとしました時、炭部屋らしい所から低い人の話し聲が聞えます。外から見ますと、しつかりと戸が締つてゐて人のはいつてゐる樣子などはすこしも見えません。けれども忠左衛門は、

『確かに吉良はここにゐるにちがひない。』

と思ひました。そして、

『皆、集つてこ、――い。』

と呼びました。一同がかけよりまして戸を押し破つて中に入りますと、眞暗の中に確かに人かげが見えます。と、その中の一人が飛び出してきました。『エッ』と斬り倒してしまひました。又一人逃げ出す所をこれもバサリ。まだ一人殘つてをります。その者は刀を拔いて寄つたら斬らうと身構えしてゐる樣子であります。この時、問十次郎が槍をしごいて、その者につきかゝりました。たしかに手ごたへがあつたと思つてゐます時、武林唯七が駈けよつて、刀で斬りつけました。曲者は悲名をあげてそこに倒れました。明るい所へ引きずり出してよくみますと、白い小袖を着た老人であります。

『只者ではない』『吉良ではないか』『顏をよく見よ、ご主人の刀の創痕はないか。』

と、しらべましたが、去年内匠頭に斬りつけられた疵はどうなつたか、よく判りません。

『それでは肩を見よ。』と肩をしらべますと、たしかにそれらしいあとが殘つてをります。

『吉良だ、吉良だ。』『上野介だ。』

と、みんなは我知らず大聲に叫びました。『あゝ有難や、これで年來の本望が遂げられた。』と思ひますと、嬉しいとも悲しいとも知れない涙が誰の眼からも流れ出ます。

やがて大石良雄は刀を拔いて進みよりました。刀の尖は上野介の咽喉に深くつき入りました。これは『止めをさす』といふ仇討の作法であります。そして問十次郎をふりかへつて、

『一番槍の十次郎殿、首をお打ちなさい。』

といひました。十次郎はよろこんでその首を打落しました。

同志の中に怪我した者はないかと、しらべてみますと、輕い傷を受けた者は四五名はありましたが、殺されたものは一人もありません。傷をうけた人たちにはそれ〳〵手あてをして、一同は目出度吉良の屋敷を引上げました。回向院の前まできて、もしや上杉の方から追手でもかゝりはしないか、と待つてゐましたが、それらしい影も見えませんので、一同は泉岳寺をさして、列を作つて進みました。兩國橋の上にきた時分は、赤い横雲の東の空にこの義士たちの壯擧をほめるかの樣に朝日がのぼらうとしてをります。途中には早その噂がきこえましたか、街の人々が、

『淺野さんの御家來たちぢや。』

『吉良の屋敷へ討入つて今引き上げる所ぢや。』

『あれが吉良の首だ。』

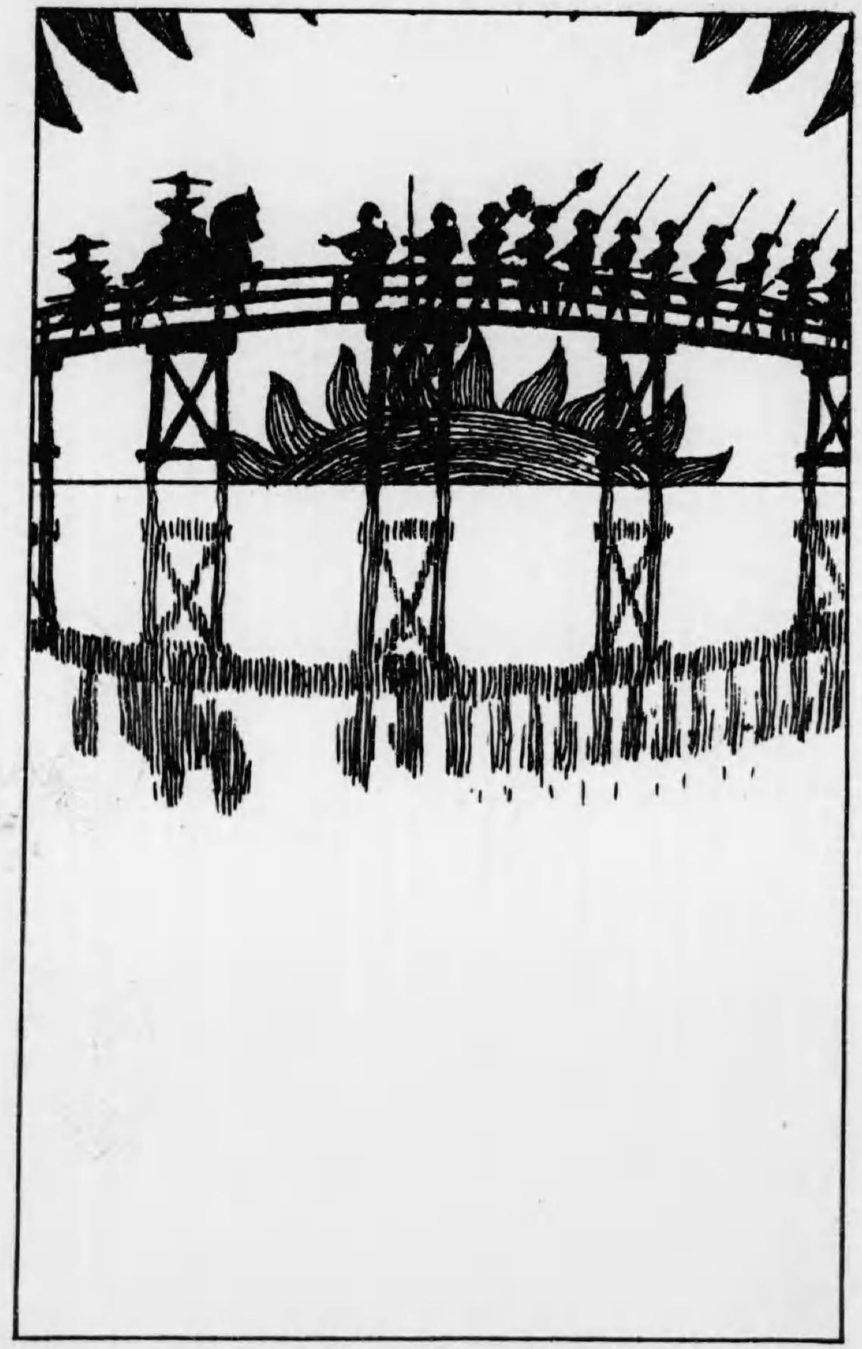
『偉い事をしたぢやないか。』

と口々にほめてゐました。

泉岳寺まで行きまして、門をしめて、一同は内匠頭の墓の前に吉良の首を供へて、復讐の報告をいたしました。

地下の内匠頭もよろこんだでありませう。義士の人たちも語る言葉もないまでによろこびました。良雄はまた奥様瑤泉院へも、弟の大學の方へもその事をしらしました。

良雄等は泉岳寺に止まつてゐて、吉田忠左衞門、富森助衞門を使として幕府の大目付仙石伯耆守に吉良の屋敷に討入つたこと、上野介の首をとつたことを届けさせました。伯耆守もその美舉に大そう感じ入つて、



義士の引上

『これから直樣幕府に屆け出るから、御沙汰のあるまではゆる〳〵此所でお待ちなさい。』

と、二人には朝のご飯など出してねんごろにもてなし、自分は幕府をさして籠をいそがせました。

幕府の役人たちもその事をききますと、感心な人々であるとほめられ、將軍さへも、

『定めし苦心した事であつたらう。』

と、感心なさいました。

但しその行がどれだけ立派でありませうとも、お上にも屆け出ず、他人の家に斬り入りその主人を殺したといふ事は、規則の上から見て許すわけにはまゐりません。そこで、大石良雄以下十七人のものは熊本の城主細川綱利に、大石主税以下十人は松山の城主久松定直に、他の十人を長門の長府の城主毛利綱元に、殘りの十人を岡崎の城主水野忠之におあづけになりました。

あづかつた大名たちは、罪人ではありますが、たゞの罪人でありませんので、出來

る限り親切に、そして手厚くもてなしました。

その後吉良の家はどうなつたかといひますと、上野介には養子の義周といふ嗣子があるのでありますが、義士の討入の晩にはどこかへ逃げて命はたすかりましたが、元祿十六年の二月の四日になつて、幕府から、

『淺野の遺臣討入の時には其方の仕方不屆につき領地を取り上げて上諏訪忠虎にお預けする。』

と、領地もとられて信州の高島へ流されてしまひました。

同じ日四十六人にも、――四十七人の中の一人寺坂吉右衛門はこの時をりませんでした。吉右衛門は他の人々よりも身分の低くかつたので、良雄は討入りの朝泉岳寺へ行く途中瑞泉院や、大學の所へ使に出したのをそのまゝにしておいたのであります。

――切腹を云ひつけられたのでありました。四十六人は潔よく切腹いたしました。一同の屍は主人の墓のある泉岳寺に葬りました。

時は丁度元祿時代、武士には武勇といふ氣持ちが衰へ、町人はたゞおしやれに身を

持ちくずしてゐる時、この勇ましい行が行はれたのでありますから、日本中の人たちはみんな感心いたしました。そして明治大正になる今日までその美談を語りつたへてゐます。

明治元年に明治天皇が東京へ行幸せられた時にも、

『固く主從の義を重んじ仇を復し法に死し人をして感奮興起せしむる忠節を嘉す。』

といふ御勅語を賜はりました。地下の四十七士も定めし皇恩の辱けなさに感泣したことでありませう。

1 五代將軍綱吉は學問を好み朝廷を尊んだ。
2 綱吉は政治に倦む樣になつて、能樂をこのみ佛教を信じて殺生を禁じ、犬を愛して人民の迷惑を顧みなかつた。
3 綱吉の頃の奢の盛であつた時代を元祿時代といふ。
4 大石良雄等四十七士は主人の無念をはらすためにその仇を復した。
5 この大石等の行は當時の人々の心を勵ますことが多かつた。

第四十二　新井白石

一　火兒

火兒は生れながらに他の子供とちがつてゐました。他所の子が豆大豉を弄ぶ時分には、もう紙を本の上に重ねてむづかしい字を寫して、

『お父様、坊は字を書いたよ。』

とよゐこんでゐました。

『火兒よ、どれ〳〵成程な「子曰」とかけたな。偉い〳〵。』

とお父様は目を細くしてよろこんでをりました。それにしても『火兒』とは變な名です。ほんとの名は傳藏といふのですが、傳藏の生れたのは明和三年の二月で、その前の月に江戸に大火事がありましたので、お父さんの仕へてゐる、上總國久留里の領主、土屋利直が傳藏を『火兒』と呼んだのでありました。

お殿様のお國は上總でありますが、この時分大名たちは大方江戸の屋敷にをりましたため、この火兒も江戸の柳原に生れたのでありました。

三つで字を書きはじめた傳藏は、大きくなるにつれて天性の利口がだん〳〵とあらはれ、六歳の時には父様のお讀みになる支那の詩をいくつもそらで覺えてゐました。七つの時でした。お父様とお母様とは傳藏をつれてお芝居をみにゆきました。お芝居は大人でもなか〳〵わからないものでありますが、お家へかへつてから、お父様が、

『傳藏、お前にあのお芝居のしてゐることがわかりましたか。』

と尋ねますと、傳藏は少しの間違もなく、芝居の筋や、その時の心持などを話しましたので、みんなが驚いたといふことであります。

傳藏は八歳の時からお手本について習字を始めました。しかもその習ひ方が遊び半分の仕事ではありません。お畫の中に三千字、夜は二千字と正しく日課をたてまして、少しもなまけることはありませんでした。けれども春から夏への日の永い時分はそれ程苦勞でもありませんでしたが、秋から冬へかけての日の短い時には、まだお畫の仕事がすまない中に早や日が暮れかゝつてまゐります。こんな時傳藏は、西向の竹の縁に机を持ち出して、寒い風に可愛い手をまつ赤にしながらも、殘りの字を習つてしまひました。さてそれから夕飯をいたゞいて、又夜のお稽古にかゝるでありますが、夜の更けますにつれてだん〴〵と眠くなつてまゐります。こんな時、傳藏はいつも二つの桶に水を汲んでその竹の縁の所に置いておきまして、眠くなりますと、まづ裸のまゝ竹の縁に飛び出して、一桶の水をかぶつて眠氣をさましました。お話だけでは何ともありませんが、こんな時、雪の降る寒い夜もあつたでせうし、身を刺す樣な風の夜もあつたにちがひありません。綿入を幾枚重ねても寒いこんな時に水をかぶつてまでも手習をつゞけることは一通りの考では出來ません。傳藏はかうして又字を習ひま

新井白石

す。又眠くなりました時、あとの一杯をがぶつてやつとその日の仕事をしまひました。この一通りでない勉強をいたしましたので、九歳頃からお父様に代つて立派に手紙がかけたといふ事であります。

傳藏が生れた時から『火兒』などと可愛がつてくださつた殿様も、傳藏がこんなに優れた子供になりましたので、十三歳頃からはご自分のお手紙までも代筆させて、いつもお側からおはなしになりませんでした。

傳藏はこんなに學問の方だけがよく出來たのではありません。十一歳の時から武士に必要な劍術も習ひはじめました。これもやつぱり上手になることが早く、その年の中に、十五六の人たちを相手にしても時々は勝つたと云ふ事であります。

しかし何をいふにも傳藏の一番精出した事は學問でありまして、根氣のよい上に、記憶力がつよく、大抵は先生につかず、自分一人で勉強して、少しもなまけることはありませんでした。

白石が十九になつた時でした。長い間お世話になつた殿様の利直が病死いたしまし

た。子の頼直がその後をつぎましたが、その時家來たちの中でよくない事を考へた人たちがありましたので、傳藏の父もお仕へを止める事になりました。これから傳藏の一家は貧乏をしなくてはならなくなりました。でも傳藏は貧乏に弱つて學問を止めにする樣なそんな不甲斐ない者ではありませんでした。

『男だ、生れた以上は天下の大政治家とならないでゐるものか。それが出來なければ、死んで閻魔王となるのだ。』

と、貧乏を物ともせず、日本の書物はもとより支那の學問までありとあらゆる書物を讀んで勉強をつゞけました。

傳藏は元服をしてから名を君美と改めました。そして學問についての名を白石とつけました。それで世の中の人は白石と呼ぶ樣になりました。

その時分、江戸に河村瑞軒といふ大金持がありました。今の言葉でいひますと、大成金であります。その大成金が孫娘の婿をさがしました時、この白石を世にも立派な若者と思ひました。そして自分の婿にしたいと考へました。そこで、

『三千兩で求めてある土地をあげるから、孫女の夫になつて下さい。その他學問のために入るお金ならばいくらでも出しますから。』

とたのみましたが、白石は

『御志はありがたう存じますが、お金がほしくて金滿家の婿になつたといはれては恥しくも思ひますし、私も亦人の助けによつて出世をいたさうとも思つてをりません。惡く思つて下さいますな、お斷りをいたしますから。』

と、斷りました。白石はどこまでも、自分の力一つで世を渡つて行かうと考へてゐたのであります。

この考はいつ、どこの人にも大切な考であります。

二　友のために

白石はやはり苦學をつゞけてゐました。その二十六歳の時の事でありました。下總の古河の城主でその頃幕府の大老であつた堀田正俊に仕へました。ところが運惡くも、

それから二年たつて幕府で稲葉正休といふ人のために刺し殺されてしまひました。しかし、その後もやはり堀田家に仕へてをりましたが、當時有名な學者木下順庵の所へ弟子になりましたので、三十五歳の時、堀田家を出て又もとの書生となりまして、一層學問の研究をいたしました。それといつしよに貧乏は前の通りになりました。けれども白石はその苦しさをこらへて學問をつゞけました。先生の順庵も白石の精神と學問の深いのに驚きました。そして、

『この人はいつまでも私の所にをる人ではない、實に立派な人だ。早くよい主人を見つけてやりたいものである。』

と考へてゐました。所が折よくも、もと順庵の仕へてゐた、加賀の前田家から

『立派な學者を一人お世話して下さい。』

と頼んできました。順庵はよろこんで、前田家は日本一番の大大名、願つてもこれ程のよい主人は又とあるまい。白石を加賀に薦めよう。又前田家にとつても白石の様なすぐれた學者を得ることは幸福にちがひないと、いよ〳〵白石を前田家に推擧するこ

とにきめました。その時白石は先生の親切を嬉しく思ひながら、これから自分の今まで修めた學問を役立てようとよろこんでゐました。

すると或日白石の家へ同じ順庵の弟子の岡島石梁といふ人が訪ねてきました。石梁は、

『ほんとにお目出度い事です。それにつきましても、私は加賀の生れでございますが、郷里には一人の老母がをりまして、あけくれ私の出世を待つてをります。もし順庵先生が私を加賀へ御推薦して下さる様な事がありましたら、定めし母もよろこぶ事と思ひます。前田家へ行かれることを一つ私におゆづり下さる事は出來ないでせうか。』

と、いひにくさうにたのみました。白石には今大きな幸福が身を包まうとしてをるのでありますが、今友達の願ひをききますと氣の毒でたまりません。『岡島のたのむのも尤である。私が長い間苦しい勉強をしたのも、一つはどうかして親に安心をしていたゞきたく、喜んで下さるそのお顔を見たかつたのだ。それに私のお母様はまだ私の